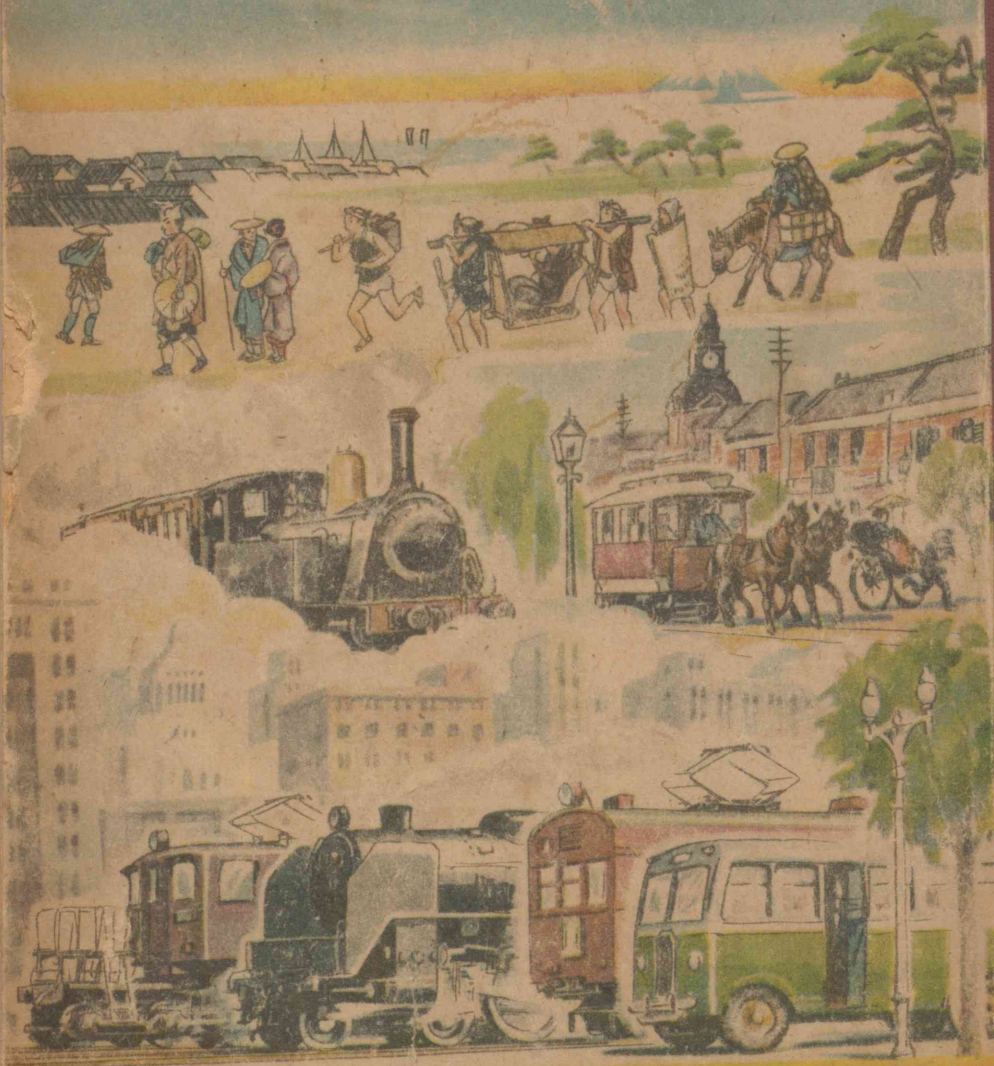


# 日本のむかしと今



文部省著作教科書

50020

教科書文庫

5.
300
34-1948
20000 41375

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

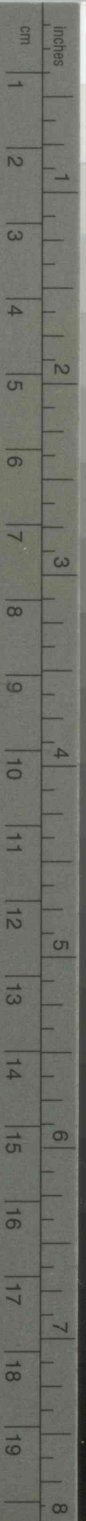


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



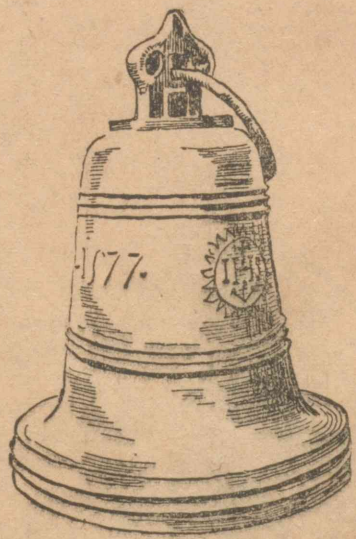
日本のむかしと今



資料室

325.9  
M014





一、だれが世の中を今のようになりにしたか……………一

べんりな世の中……………一

科学者をたすけた人々……………一六

二、どんなふうにして商業がさかんになり、町ができて  
いったか……………二一

商業のおこり……………二一

市のはじまり……………二四

商人のはじまり……………二七

かへい……………三三

村から町へ……………三七

町の人々……………四二

いなかの人々……………四八

三、人々は、むかし、どんなふうにしてゆききをしたたり、も  
のごとをしらせあつたりしたか……………五五

むかしの旅……………五五

道のおこり……………六二

むかしののりもの……………六六

水の上の交通……………七〇

むかしは、手紙をどういうふうにしてはこんだか……………八一

もじは、どのようにしてできたか……………八七

かんじとかな……………九二

のろしたいこはた……………九五

四、どんなふうにして、今のようになべんな世の中にな  
つてきたか……………九八

外国とのゆきき……………九八

新しい政治……………一〇六

新しい生活……………一一一

大きな工場……………一二〇

農業のうつりかわり……………一三一

新しい学校……………一三九

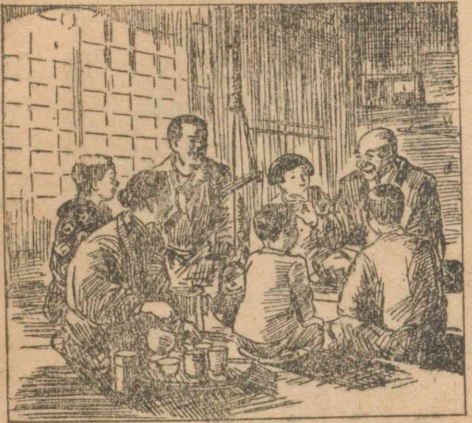
五、私たちの村は、むかしとくらべてどんなふうにかわつ  
てきたか……………一五〇

教師のかたがたへ……………一七二

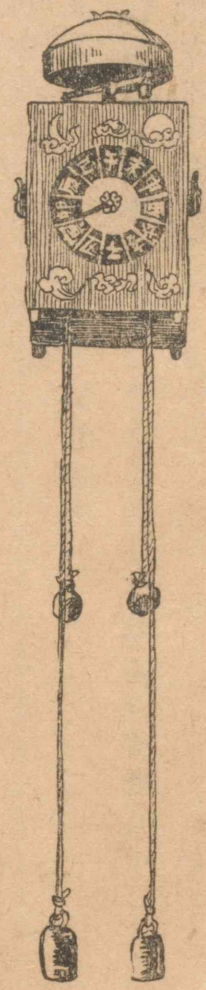
青島大  
圖書印

一、だれが世の中を今のよう**に**べんりにしたか

べんりな世の中



「おじいさんが、まだみんなの**よう**に、小さい**こ**ども**だ**ったころには、こんな**あ**かるい**電**とう**な**どというものは、どこを**さ**が**し**ても**な**かつたものだ。あかり**と**い**え**ば、今**て**い電の**と**きに**使**う、あ**の**く**ら**い**ラ**ンプ**し**かな**か**つた。ま**い**あ**さ**、学**校**に**い**く**ま**えに、お**と**う**さ**ん**に**い**い**つ**け**ら**れ**て、**ラ**ン**フ**う**フ**う**い**き**を**ふ**き**か**け**な**が**ら、**ラ**ン



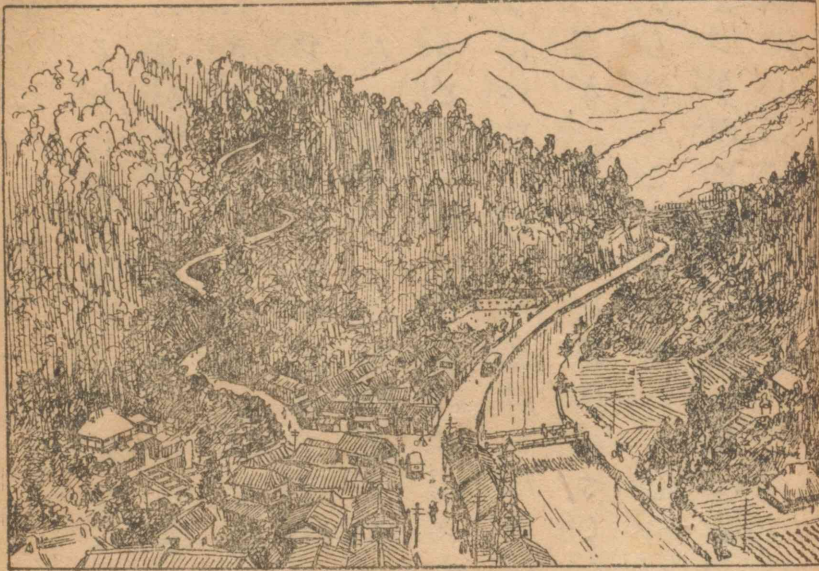
ブのほやをみがいたのをおぼえているよ。」

夕はんがすんで、みんながお茶をのみはじめると、おじいさんは、いつものように、にこにこしながら、むかしばなしをはじめました。廣く<sup>ひろく</sup>もみちこさんも、おじいさんのりようわきにすわって、たのしそ<sup>たのしそ</sup>うにお話をきいています。

おとうさんやおかあさんも、いそがしかつたいちにちのしごとがおわって、ほつとひといきつかれたところでは、みんながあつまって、ゆかいに話しあう夕ごはんのあとは、ほんとうにたのしい時間です。

へやのかたすみのラジオからは、きもちのよい夜の音楽<sup>おんがく</sup>がきこえています。

「なにかの用で、山のふもとにあるおしろの町へでかけてい



くのも、まったく大しごとだった。朝早く、いちばんどりがなくとすぐおきだして、いちにちぶんのべんとうをもち、ふたり三人つれだつて、でかけていったものだ。

なにしろ、ほら、家のまえにみえるあのとうげをこして、四里の山道をしてくてく歩き、町であちらこちらと用事をたして、また歩いて帰つてくると、家につくころには、もうすっかり日

がくれていたよ。

それに山のなかも、おじいさんのおとうさんのころには、森のなかでときどきおさるが遊んでいるのをみかけたというくらいさびしいものだったからね。

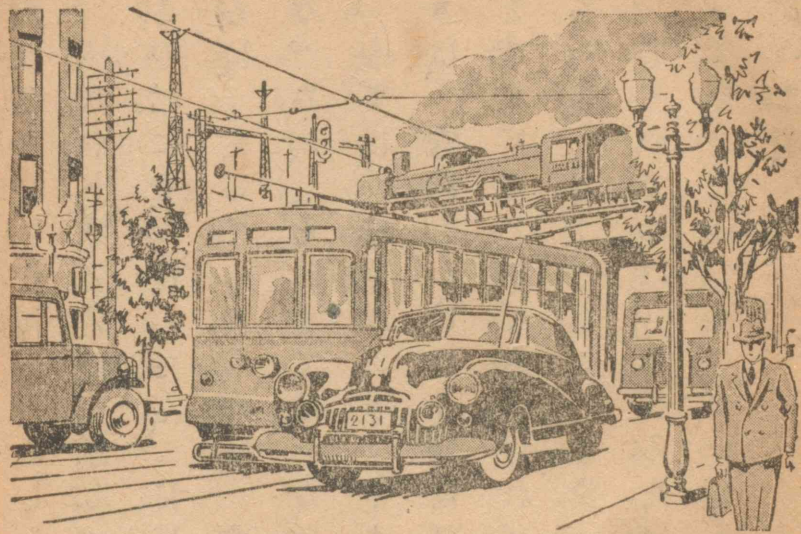
おじいさんのわかいころは、今の縣道も、まだできていなかった。だから、バスの通<sup>も</sup>っているはずもない。今では、バスにのると、一時間ぐらいでいってしまいが、そのころは、ほんとうにいちにちしごとだったのだ。

だが、川ぞいに縣道がつくられて、バスが通るようになってからは、この村もたいへんべんりになってきた。むかしは、おまつりのときに、町からいろいろな商人<sup>しやうじん</sup>がはいりこんできて、市<sup>いち</sup>をひらいて、めずらしいものやほしいものを賣<sup>う</sup>ったが、村の

人はみんな、それをたのしみにしていたものだね。

バスやトラックが、どんどん縣道を走るようになってからは、この村にも、だんだん、お店らしいものができてきた。それからは、たいいていものは、遠くへいかななくてもまにあうようになったが、それまでは、なにしろたいへんなすうだったよ。

今では、ゆうびんきょくもできて、町にいきの用があるときは、電話をかけたり、電ぼうをうつたりして、かんたんに用をすますことができるけれど、むかしは、そんなときにも、いちいち、とうげをこして歩いていかなければならなかったのだ。おじいさんは、きざみたばこをふかしながら、むかしのありさまを、たいへんなつかしそうちに、おもしろく話していらっしやいます。



これは、とかいのにぎやかな通りのありさまです。  
どんなべんりなものがあるでしょうか。

おじいさんのお話にもあつたように、今の世の中は、むかしにくらべると、いろいろなことが、おどろくほどべんりになっていきます。おじいさんのお話のなかにてきたもののほかに、今の世の中には、どんなべんりなものがあるのでしょうか。

汽車、汽船、飛行機、水道、ガス、時計、えいがと、べんりなものをかぞえあげれば、

かぎりがありません。

もしこのよくなべんりなものがなかったとしたら、私たちのまいにち、まいにちの生活は、どんなにふべんでしようか。それは、ちよつと考えてみても、すぐわかることです。

ではいつたい、こんなべんりな世の中になつたのは、だれのおかげなのでしようか。

これは、むずかしい問題です。こんな世の中になつたのは、けつしてひとりやふたりの人の力ではありません。人間の生活をすこしでもよくしたいと思ひ、自分のしごとにいっしょうけんめいはげんだ、たくさんの人たちの力がなかったならば、世の中はけつして住みよいものにならなかつたことでしよう。しかし、そういう人たちのなかでも、とくに目だつ人々があ



ります。それは、いろいろな発明はつめいによつて、人間の生活をたいそうべんりなものにしてくれた、すぐれた科学者がくしやたちです。電しんきは、モールス。電話は、ベル。むせん電しんは、マルコニー。汽車は、ステイブソン。汽船は、フルトン。そして、飛行機は、ライト兄弟が、今使つてゐるような電とうは、エジソンが発明してくれたのです。

そのほか、今の世の中で役にたつてゐるいろいろな道具やきかいは、どれもこれも、すぐれた科学者の苦心によつてつくられたものです。あなたがたは、科学者たちが、そのようにすぐれた発明をしとげるために、長いあいだどんなに苦心したかということを、お話でよんだり、きいたりしたことがあるでしょう。ここでは、エジソンが電とうを発明するために、どんなに

どこの國の、だれが、いつ発明したのでしょうか			
	いつ	だれ	どこの國
ぼうえんきょう	1619	ガリレオ	イタリア人
はしらどけい	1636	ホイヘンス	オランダ人
かんだんけい (アルコールの)	1709	ファレンハイト	ドイツ人
ひらいしん	1752	フランクリン	アメリカ人
じょうききかん	1765	ワット	イギリス人
でんち	1779	ヴォルタ	イタリア人
汽船	1807	フルトン	アメリカ人
汽車	1825	ステイブソン	イギリス人
電しん	1837	モールス	アメリカ人
電話	1875	ベル	アメリカ人
ガソリン自動車	1879	セルデン	アメリカ人
電とう車	1879	スワソン	イギリス人
電えい	1881	シーメンス	ドイツ人
むせん電しん	1891	エジソン	アメリカ人
飛行機	1896	マルコニー	イタリア人
	1903	ライト兄弟	アメリカ人

ク燈は、とりあつかいがふべんで、そのうえ手にいれるのもらくではありません。そこで人々は、もつとてがるに光をだせる

苦心したかといふことを考えてみたいと思ひます。エジソンよりまえにも、電氣であかりをともしようと考へていた人々がたくさんありました。たとえば、もうアーク燈あークとうといふものが発明されてゐて、電氣を使つて光をだしてゐました。しかし、アーク



ものをつくりたいと思いました。はじめにそのくふうをしたのは、イギリス人スワンでした。それにつづいて、エジソンがけんきゆうをはじめました。電きゆうのなかのせんの材料は、高熱をくわえてもとけてしまうことがなく、いつまでも長もちし、そのうえ、かんたんにつくれるものでなくてはなりません。エジソンはまず、熱をくわえたときあかるく光るせんを、どんな材料でつくつたらよいかということで、たいへん苦心しました。そして、手にいれることのできる材料は、みんなあつめて、それをひとつひとつためしてみました。ちよつと光つたかと思うと、すぐばくはつしてしまっ

たこともなんべんがありました。しかしエジソンは、とうとう千六百しゆるいもの材料をためしてみて、やつとたんそというものでつくつたせんがいちばんよいことを発見しました。

しかし、そのつぎにこまつたことは、どうしたらほそいじょうぶなたんそそのせんをつくるかといふことでした。そのためにもまた、いろいろな材料をあつめて、なんどもためしてみなければなりません。こうして、なん百かい、なん千かいと失敗をくりかえしたのでしたが、とうとうもめんのいどでつくつたたんそそのせんを使つてみたとき、はじめて四十時間ものあいだ、光をだすことに成功したのです。

こうして、じつさいに使える電きゆうができたおかげで、それからのち私たちは、夜の勉強もたいへんらくになったばかり

でなく、ランプを使ったときのようになり、火事をだす心配もなくなりました。

このように、今使っているような電灯とは、エジソンといふすぐれた科学者が、長いあいだしんぼうづよく苦心して、やつと発明したものでした。しかし、ここで、もうすこし考えてみてください。これは、いったい、エジソンひとりの力だけでなしとげられたことでしょうか。

エジソンが苦心したのは電きゆうをつくることでした。しかし、電きゆうから光をださせるためにひつような電氣をはじめておこしたのは、いったいだれでしょうか。

電氣を入間の手で思うようにおこすことに成功した人は、エジソンよりも、百年ほどまえに生まれたイタリア人ヴォルタでした。けれども、ヴォルタのおこすことのできた電氣の力はまだよわくて、大きなしごとをするには役にたちませんでした。電氣がどンドン使われて、世の中の役にたつようになったのは、それから三十年ぐらいのちに、ファラデイという人が、強い力をもった電氣をおこす方法をくふうしてからのことです。しかし、こう考えてくると、エジソンの電きゆうの発明も、まえにヴォルタやファラデイのしてくれたしごとがなかったならば、あのように成功しなかつたかもしれません。そればかりでなく、このように人間が自分の手で電氣をおこすことができ、それをいつでも思うように使えるようになるまえに、電氣というものを発見したり、長いあいだ、電氣について熱心にけんきゆうをつづけてきた人々があることもみ

のがせないでしよう。

むかし、ギリシアの人々のあいだにいつたえられていた話のなかに、こはくという石をこするとふしぎな力がおきて、かるい鳥の羽などをひきつけるものだということがありました。

そこで、このふしぎな力とか、おそろしいかみなりとか、じやくのはりを動かす力などが、ふしぎがられて、いろいろとけんきゆうされていたようです。けれども、長いあいだ、このような力がどんなものであるか、またどんなふうにご利用できるものであるかということば、わからないままでした。

ところが今から百九十年ほどまえに、アメリカのフランクリンという人が、かみなりも、こすつたこはくがものをひきつける力も、同じものにちがいないと考え、かみなりのなっている

ときに、たこをあげてためてみました。そこではじめて、人

間は電氣のしようたいをつかまえることに成功したのです。さきほどお話ししたヴォルタが、はじめて電氣をおこしたのは、このフランクリンの発見から五十年ほどのちのことでした。

こんなふうには、むかしのことまでふりかえつて考えてみると、エジソンの電とうの発明も、エジソンひとりの力でやりとげたことではなく、フランクリン、ヴォルタ、アラデー、スワンというような、むかしのすぐれた科学者のかくれたたすけがあつたことがわかります。

ところで私たちが今、まいにちなんにも考えずに使っている

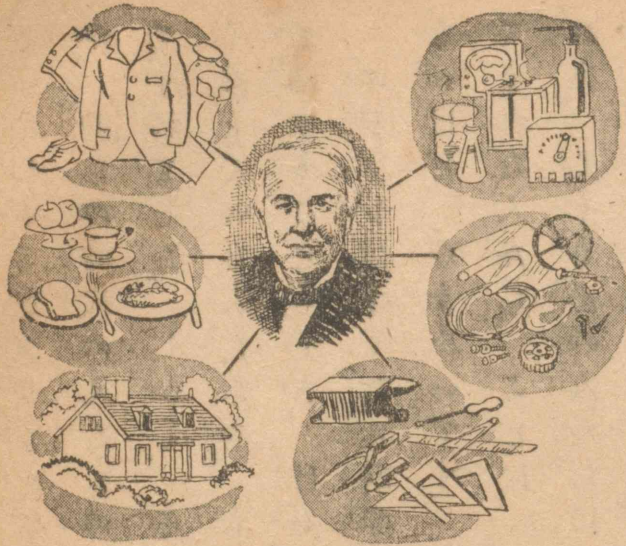


いろいろな道具についても、それをつくりだした人の苦心のほかに、それをつくりだすことをたすけたたくさんの人たちの苦心のことを考えることがひつようです。

ではエジソンが電とうを発明したときにも、その成功をたすけた人々は、フランクリン、ヴォルタ、ファラデー、スワンなどのすぐれた科学者のほかに、もつとたくさんあつたはずです。

### 科学者をたすけた人々

エジソンが、電とうの発明に成功したのは、このような科学者ばかりでなく、もつともつとたくさんの人々のおかげでした。私たちは、エジソンと力をあわせて、そのけんきゆうをたすけた人々、なんども失敗したエジソンを、そのたびになぐさめはげましてカづけた人々のかくれたほねおりをわすれてはなりません。そういう人たちもまた、人間の生活をよくしようと苦心したりつばな人たちです。けれども、エジソンの発明をたすけたのは、そういう人たちだけでしょうか。



エジソンは、あかるい電きゆうを發明するために、ひじょうにたくさんの材料を使ったはずです。また、けんきゆうにひつようだった道具やきかおも、きつとすくなくはなかつたことでしよう。そういう材料や道具やきかいは、いつたい、だれがつくつてくれたのででしょうか。エジソンは、きもちのよい、あか

るい光のでる電きゆうを發明して、そのころの世の中の人たちや、のちの時代の人たちの生活を、たいそうべんりなものにしてくれました。しかし、そのエジソンも、そのころいつしよにくらしていた人たちや、もつとまえの時代の人たちのおかげで、生活することもでき、けんきゆうすることもできたのです。

エジソンはすぐれた科学者として、だれひとり知らぬものがないほど、ゆうめいです。しかし、エジソンのしごとをたすけてくれた人たち、ことに、エジソンを思うように勉強させてくれた、たくさんの人たちについては、今ではその名まえをさえ、たぶん知っている人はないでしょう。けれども、もしエジソンよりもまえに、またエジソンといっしよに、そういうかくれた人たちがいなかっただらば、いくらエジソンでも、あんなにす

ぐれた發明をすることはできなかつたにちがいありません。

このように考えてみると、エジソンの電とうの發明のかけには、たくさんのすぐれた科学者の苦心ばかりでなく、むかしからのたくさんの人たちの、もつとゆたかなたのしい世の中にしたいというねがいが、かくされているのだということがわかります。

こんなふうには、私たちの生活をべんりでたのしいものにする發明や發見は、たくさんの人たちの強いねがいとほねおりとがあつまつて、しだいにできあがつてきたものです。

あなたがたが、まえに「大むかしの人々」という本でよんだように、大むかしからの生活は、たいそうふべんできゆうくつなものでした。今のべんりな世の中は、けっして、いっそくと

びにできたものではありません。

では、私たちのそせんは、世の中をべんりてたのしいものにするために、どんなことをしてきたのでしようか。私たちは、この本では、そのことをけんきゆうしてみようと思います。



二、どんなふうにして商業がさかんになり、町ができていったか

商業のおこり—人々はどんなふうにして、物と物とをこうか

んしあうようになつたのでしようか

人々は、はじめ、ひつようなものを、めいめい自分でつくるというふべんなくらしをしていました。ところが、人々のなかには、畑づくりの道具とか、そのほかいろいろの道具をつくることが、ほかの人よりとくにうまい人がいました。それがわかると、しぜん近所の人々のなかには、なにかのお礼をもつてきて、自分でつくるかわりに、そういう人たちに、道具をつくつ

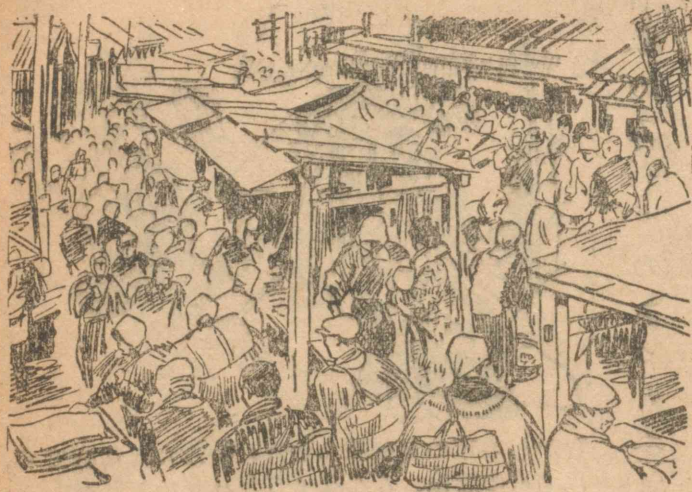
てもらうものもでてきます。こうして、たのみにくる人が多くなる、道具づくりのじょうずな人は、あまりおひやくしようのしごとをしなくても、道具をつくってあげたお礼でくらしをたてていけるので、道具づくりのほうがくらしよいと考え、だんだん、道具づくりをせんもんにする人もでてくるようになりました。

いっぽう、ほかの人々にしても、米とか魚とか毛がわのようなもの、お礼にもつていって、道具づくりのじょうずな人につくってもらうほうがかんたんですし、そのうえ、自分でつくるよりも、もつとりっぱなよい物が手にはいります。また、道具をいちいちつくるめんどうがないのですから、時間もたいそうせつやくできます。その時間だけ、おひやくしようのしごと

に力をいれることができ、したがって、たべものもたくさんとれるというわけでした。

こういうわけですから、道具づくりのじょうずな人は、まったくおひやくしようのしごとをやめてしまつても、お礼だけにくらしていけるようになりました。道具をつくるかわりに、どれだけのたべものがほしいといえは、道具のほしい人は、それだけのお礼をもつて、どんどんたのみにくるようになったからです。こうして、世の中がすすんでくると、おひやくしようのしごとをしなくてくらしをたてていく人も、しだいにふえてきました。そして人々は、そのうちに、ただ道具とたべものだけをこうかんするばかりでなく、いろいろの物と物をこうかんして、ほしい物を手にいれるというやりかたも知るようになって





これは、今の市のにぎやかなありさまです。

こんなわけで、人々は、あちらこちらからやってくるのにべりりなところに、いついつと日をおきめて、あつまることにしました。このあつまる日が、市の日です。市は、春や秋などのきせつに、また月ごとのきまつた日に、さかんにひらかれるようになったていきました。

しかし、市は、ただ物をとり



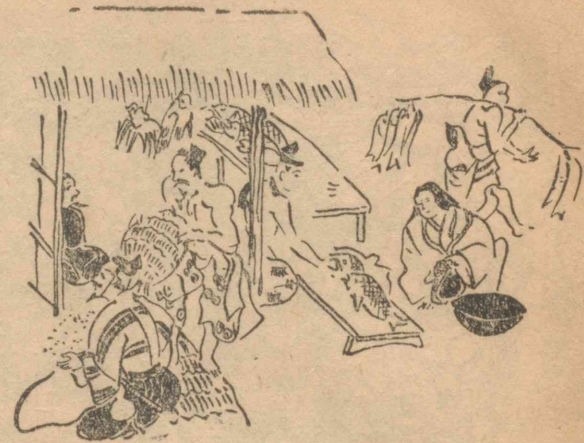
むかしの古い市のありさま

しかし、自分のほしい物をもって、いる人をさがして、いちいち遠くまででかけるのは、たいへんほねのおれるくるしいことです。また、でかけていっても、いつもつごうよく、ほしい物をもっている人に、すぐにあえるとはかぎりません。

そこで、人々は、あることを思いつきました。それは、こうかんする

いきます。今ではだれでも知っている商業ということも、きつとこんなことから始まったのでしよう。

市のはじまり



むかしの市の日にひらかれたかんたんな店です。はじめの店は、こんなふうだったのでしょうか。

かえるためだけのものではありませ  
ん。市の日には、ふきんの村の人々  
があつまつて、めずらしい物をなが  
めたり、いろいろとかわったことを  
話しあつたりするので、たいそうた  
のしみなものでした。

日本に市のひらかれるようになって  
したのは、ずいぶん古い時代のこと  
でした。今から千二百年ぐらいまえ、  
日本のみやこのあつた奈良には、た  
くさんの人々が住んでいた  
ので、早くから市がひらかれて、  
たいへんなにぎわひだつたと  
いうことです。

あなたがたの住んでいる村や町には、  
二日市、三日市、四日  
市、五日市、または、四日市場、八日市場などよばれるとこ  
ろがありませんか。これは、むかし、さかんに市のひらかれた  
場所が、土地の名になつてのこつていゝるのです。

商人のはじまり



むかしの商人。(い)あぶら賣り  
(ろ)なべを賣る人(は)さかなや  
(に)まめを賣る人(ほ)そうめん  
などを賣りある人(へ)げたや

市がひらかれる  
ようになつたこと  
は、人々のくらし  
にとつて、たいへ  
んべりなことで  
した。しかしそれ  
でも、市の日には、

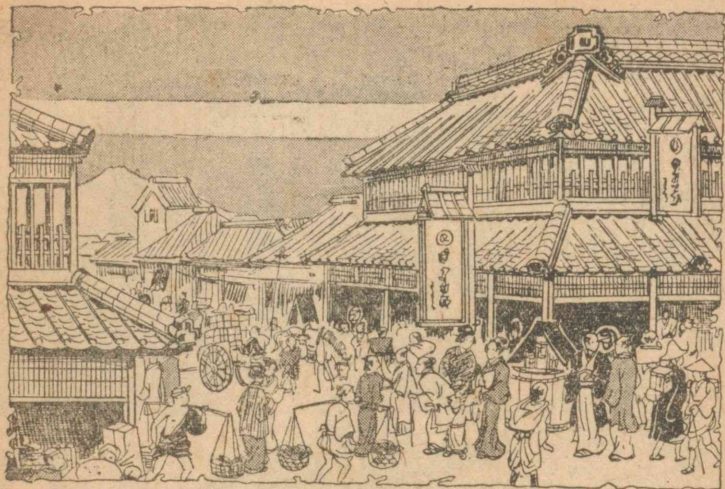


この絵は、自分の物とほしい物とをとりかえあうのに、どうして商人がひつようになつてくるかをしめしたものです。ばんごうのじゅんじょによんで、そのいみを考えてごらんさい。

自分のほしいものがすぐに手にはいるとはかぎりません。ある人が、魚と毛がわとを、こうかんしたいと思つていても、その市の日、つごうよく、毛がわと魚とをこうかんしたいと思つてゐる人に、であうとはかぎりないからです。

たとえば、ちようど、毛がわをもつてゐる人にであつても、その人は魚をほしがらないで、お米をほしがつていました。また、お米をもつてゐる人は、毛がわをほしがらないで、魚をほしがりました。こんなときには、三人の人がうまくいっしよにであいでもしないかぎり、こうかんすることはできないわけです。

いったい、こんなときには、どうしたらよいでしょうか。こうかんのせわをする、商人というものが、あればよいのです。



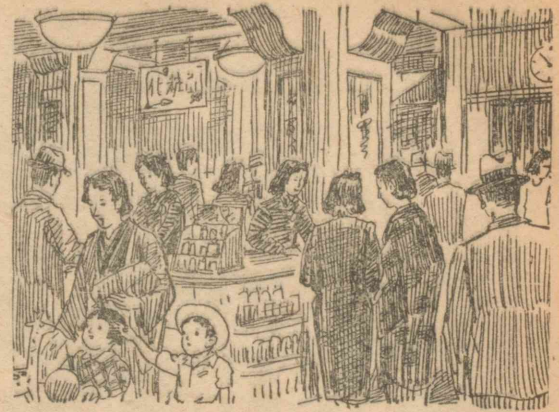
これは武士の世の中のあるころの、江戸の町のにぎやかな町のありさまです。江戸や大阪などの大きな町には、こんなりっぱな店ができてくるようになりました。

て、その土地に店をつくって、さいごには、そこに住むようにさえなつていきました。もつとも、店といつても、はじめはそまつでかんたんなものだつたでしょう。しかし、それが、だんだんりっぱな店になり、賣る品物も、米屋ならお米ばかり、さかな屋ならさかなばかり、というように、なにかをせんもんに賣るようになっていったのです。このようにして、物と物とを



これは武士の世の中のはじめのころの店の絵です。市のたつところには、しだいにこんな店ができていくようになりました。

商人は、自分で、なんにもつくらないで、ひとのものと、ひとのものをとりかえてやります。まえまえから品物を用意しておいて、買いくれば、いつでもまああうようにしておいてやります。人々のうちには、このようにしてくらしをたてる商人というものが、だんだんでてくるようになりました。これで、人々はもう、むかしのようになり、いちいち自分のほしい物をさがして、歩きまわるひつようがなくなつたわけです。市のたつときには、いつもたくさんの商人がやってくるようになってきました。そして、



マーケット

マーケットやデパートのなかのありさま。  
むかしの店とくらべてごらん下さい。

こうかんしあつてくらしていくことが、だんだんさかんになるにつれて、商人のかつやくもめざましくなつていきます。そして

てそれとともに、いろいろな商品をつくるしよくにんのしごと  
もふえていきました。

かへい

商業がさかんになるためには、もうひとつたいせつなものが

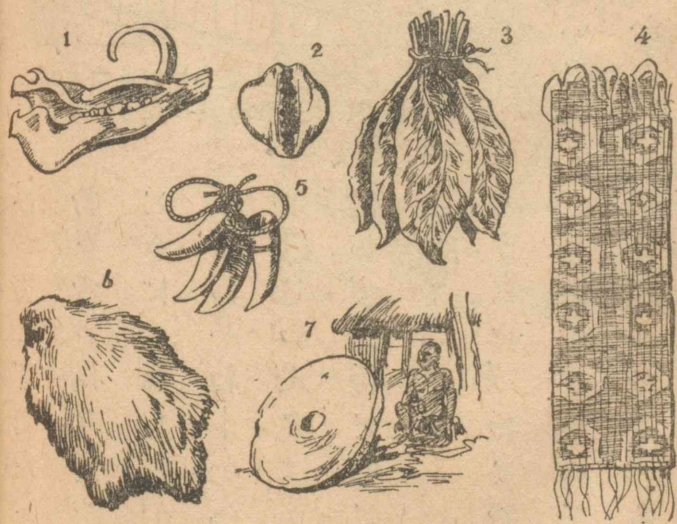


かへいは、この絵でみてもわかるように、これを使えば、買ったり買ったりするのにたいへんべんりです。

ひつようでした。それは、物を賣ったり買ったりするときに、私たちが今使っているおかね—かへい—です。はじめ人々は、おかねを使わずに物と物をこうかんにしていました。しかしそのうちに、物と物とのこうかんは、ふべんなことが多いことになり、気がついてきました。たとえば、魚と米とをこうかんしたいと思つても、あいてが魚はいらないといえ、こうかんできません。こうかんしてくれぬ人をさがしているうちには、魚がくさつてしまうようなこと

もおこつてくることでしよう。また、重い物をもつて遠くまで  
 こうかんにでかけるのは、たいへんくるしいことです。それに、  
 こうかんする物がちがうの  
 で、こうかんするわりあい  
 をきめるのもたいそうめん  
 どうでした。

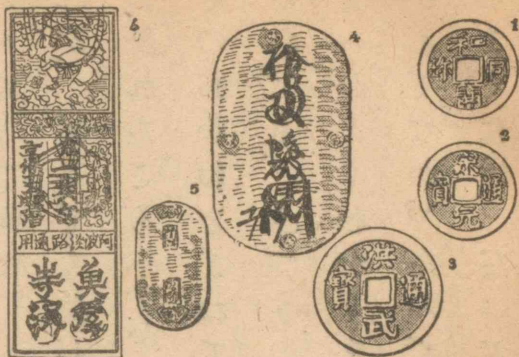
こういうふべんがあつた  
 ために、むかしの入々も、  
 ずっとまえから、おかねの  
 ようなものがほしいと思つ  
 ていました。それで、はじ  
 めは、稲やおりものよう



これは、むかし使われていためずらしいかへいです。  
 このなかのあるものは、今でも、かへいとして使つて  
 いるところがあります。1.けだもののきば 2.かいが  
 ら 3.たばこのは 4.おりもの 5.けだものつめ  
 6.毛がわ 7.大きな石のかへい

な、みんながほしがる品物を、おかねのかわりに使つていまし  
 た。おとなりの中国などでも、はじめはやはり、貝かいや小刀こがたなやお  
 りものを、おかねのかわりにしていたということです。

しかし、どうとう、中国の入々は、かんたんで、もちほこび  
 のべんりな銅で、おかねをつくるようになりました。そしてそ  
 れが、どこでも使われるようになったのです。奈良にみやこが  
 おかれたころ（今から千二百年ぐらいまえ）、私たちのそせんも、  
 そのおかねをまねて、はじめて、銅のおかねをつくりました。  
 けれども、ふつうの入々は、まだそれを、どんなふうに使つて  
 よいかよくわかりませんでした。それに、商業もまだあまりさ  
 かんてなかつたので、おかねが世の中に廣く使われるようにな  
 るまでには、たいぶ長いあいだかかったのです。



日本でむかし使われていたいろいろなかへい  
 います。(1)は奈良にみやこのあつたころ、  
 はじめてつくられたもの。(2)、(3)は武士の  
 世の中になつて使われるようになった中國  
 の明みんという國のかへい。(4)、(5)はそのうち  
 に日本でつくられるようになった金のかへい。  
 (6)はやはりそのころの紙のかへい。

こんどはどしどし使われるようになっていきました。

もつとも、そのころ使われていたおかねは、はじめのうちは、  
 中國から、商人たちがもつてきたものでした。しかし、そのう  
 ちに、日本でも、金や銀や銅などを材料にして、かへいができ

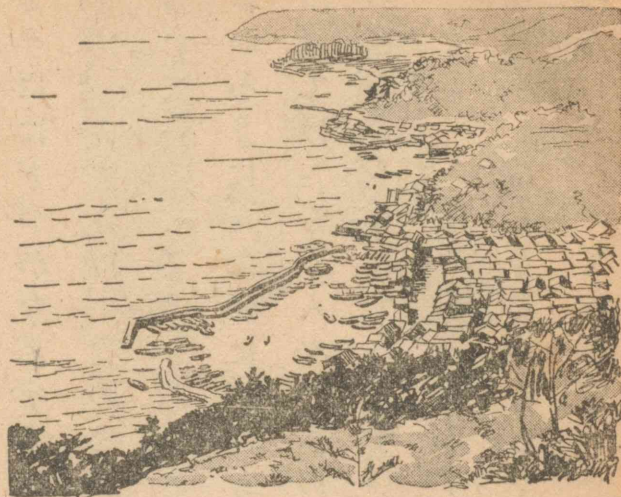
しかし、武士の世の中にな  
 ると、市があちらこちらにひ  
 らかれ、商業や工業がさかん  
 になつてきました。そうなる  
 と、どうしても、おかねを使  
 うことがひつようになります。  
 そこで、長いあいだ、あまり  
 使われていなかつたおかねが、

るようになりました。

村から町へ

私たちの住んでいる村々をよくみると、村であるのに、町の  
 ようににぎやかなようすをしているところがあるのに気がつき  
 ます。たとえば、村のなかや、その近くに、大きな工場がたて  
 られているところをみてごらん下さい。人々は、畑しごとをす  
 るかわりに、工場にはたらきにいけます。そして、ふきんには、  
 工場ではたらく人々のために、いろいろな店やたてものが、ど  
 んどんつくられています。

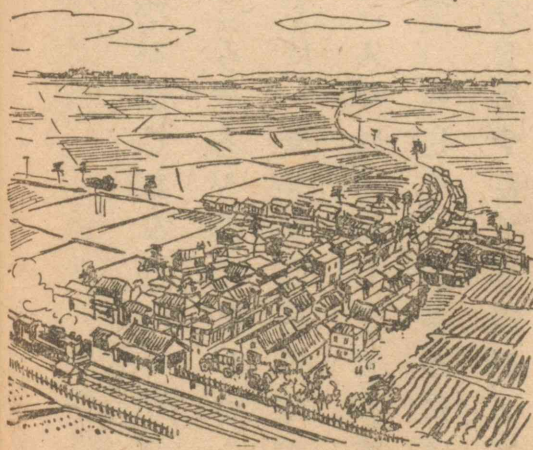
また、入江いりえやわんやみずうみにそつた村の、船つき場の近く  
 なども、たくさんのくらや、やどやや店がたちならんで、たい  
 へんにぎわっています。



入江にそつたいなかの村

りします。そしてときには、荷物をい  
れておくためのくちもたつて、村でも  
たいへんにぎやかなところになってい

そのほか、汽車の駅のふきんや、  
のりあいバスののりゆじよの  
近くなどは、汽車やバスにのりお  
りする人々のために、いつのまに  
か店がた  
ちならび、  
やどやが  
なんげん  
もたつた



鉄道の駅のまえ

ます。

このように、今私たちの住む村のなかでも、しだいに村が町  
へとかわつていくありさまをみる事ができるのです。

むかし、村ばかりしかなかつたときに、だんだん町ができて  
きたころのありさまも、これとたいへんよくにっていました。

武士の世の中になつてから、日本のむかしの人々のあいたで  
も、商業という新しいしごとが、さかんにおこなわれるようになつて  
きました。そして、人々のあつまるにぎやかなところには、商人や  
しよくにんが住みついて、村のくらしとはちがつた、町の生活が  
はじまるようになりました。

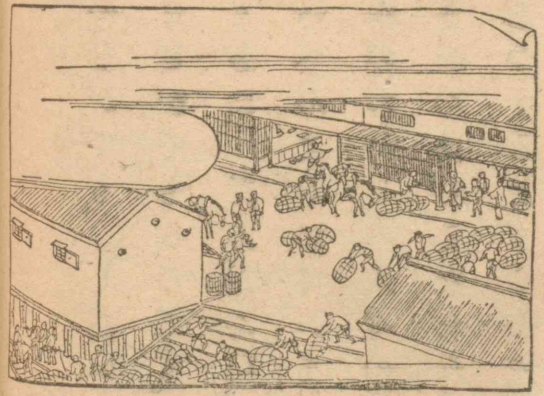
いつたい、どんなところが、早く町になつたのでしうか。  
ずつとむかしから、奈良のみやこや、京のみやこは、日本の



政治の中心地で、にぎやかな町でした。しかし、武士の世の中になつて、だんだん商業がさかんになつてくると、いなかもひらけ、あちらこちらに町らしいものができてきました。神社や寺は、入々のよくあつまるどころだつたので、そこに



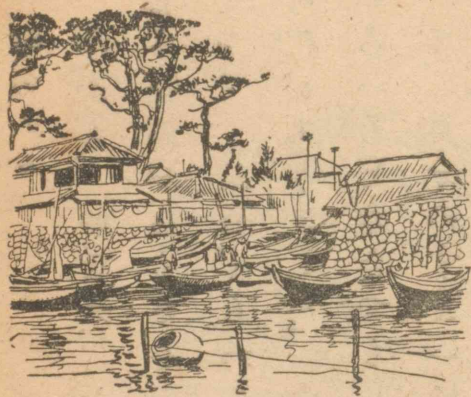
寺や神社の門のまえには、このようなにぎやかな町ができるものです。あなたがたの住んでいる村や町の近くには、こんなところがないでしょうか。



むかしの大阪の町の川にそつたところ。川をゆききする船に、くらにしまつてあつたいとたわらがつみこまれてはこばれるところです。大阪の川ぞいの通りには、このようなくらがたくさんあつていて、にぎやかでした。

は、よく市がひらかれました。そして、商人たちも、だんだんその土地に店をひらいて住みつくようになり、しだいに町らしいようすになつていきました。

また自動車や汽車のなかつたむかしは、海や川が、入々のゆききをするのによく使われました。ですから、港のふきんも、

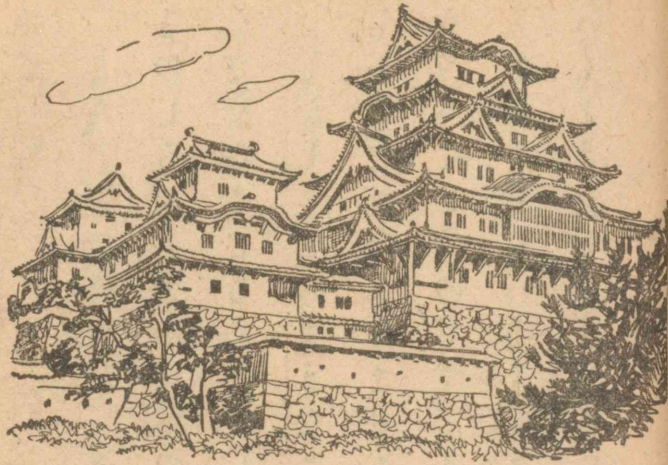


わたし場のありさま

いつのまにか、入々があつまつて、町らしくなつていきました。こんなふうに、港や、神社や寺のまえなどは、商業がさかんになつてくると、そこが、いちばんはじめに町らしくなり、それが、だんだん大きくなつていったのでした。

町の人々

今から、四百六、七十年ぐらいまえ武士の世の中がみだれて、日本全國がたくさんのとのさま—大名とよばれていました—によつて、三百ぐらゐの小さい國のようにわかれて、あらそつた時代がありました。大名たちは、自分の國を強くするため、いろいろと力をつくしていました。そして、大きなしろをつくつて、自分のすまいにしています。そこで、今までいなかで田畑をたがやして、住んでいたけらゐの武士たちは、大名のしろのまわりにあつまつて、いつしよにくらすようになりました。大名たちは、武士ばかりでなく、おおぜいの人を、しろのある町にあつめて、ぜいたくなくらしをはじめました。そこで、大名のいる町には、いろいろの商人・しよくにん、そのほか歌



ひめじの町にあるむかしのしろ

うたい・学者などが、あつまつてきました。大名は、あるときには、命令をだして、商人を自分の町にうつらせたこともあります。また、あるときには、商賣がうまくやれるようにせわをしてやつて、商人やしよくにんが、ひとりでにしろのある町へあつまつてくるようにしたこともあります。

めた織田信長は、安土—琵琶湖のそば—にしろをきづいたとき、こんなめいれいをだしました。それは、「京都にいたり、きた

りする商人たちは、これから、かならず中仙道からはなれた、この安土の町を通り、そこでとまらなくてはいけない。というのでした。

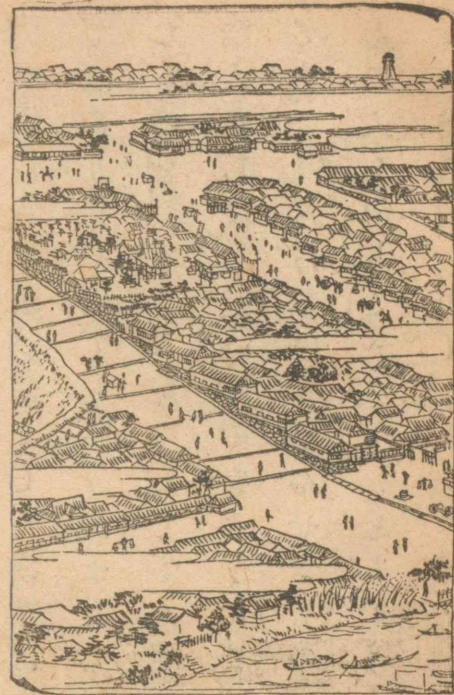
また、豊臣秀吉が、大阪に大きなしろをつくったときにも、そのしろのふきんに堺の町の商人たちをうつり住ませて、商賣をさせたこともありました。

しかし、このようなことは、信長、秀吉のような大名だけにしたことではありません。どの土地の大名も、みな同じようにやったことなのです。それで、あちらこちらに、どしどし、しろのある新しい町―城下町―ができてきて、しだいにさかえていくようになりました。

今でも、むかし、しろのあった町には、呉服町、大工町、鍛冶町、魚町というような土地の名がのこっています。これも、同じ商賣をする商人やしよくにんたちが、ひとところにあつまつてくらしていたところのあとです。

しかし、このころになって、町がさかえはじめたのには、ただこのほかにもわけがありました。

商人たちのかつやくした場所は、せまい日本の國のなかだけではありませんでした。武士たちは、めずらしいもの、べんりなものを、できるだけたくさん手にいれたいとのぞんだので、商人たちは、遠い海のもこうにまで、でていくようになったのです。商人たちは、なんせきもの商船をつくり、それにたくさんの人をのりこませて、とちゅう、あらしにあつたりかいぞくにおそわれたりしながら、もうけの多い商品を外國に賣り、め

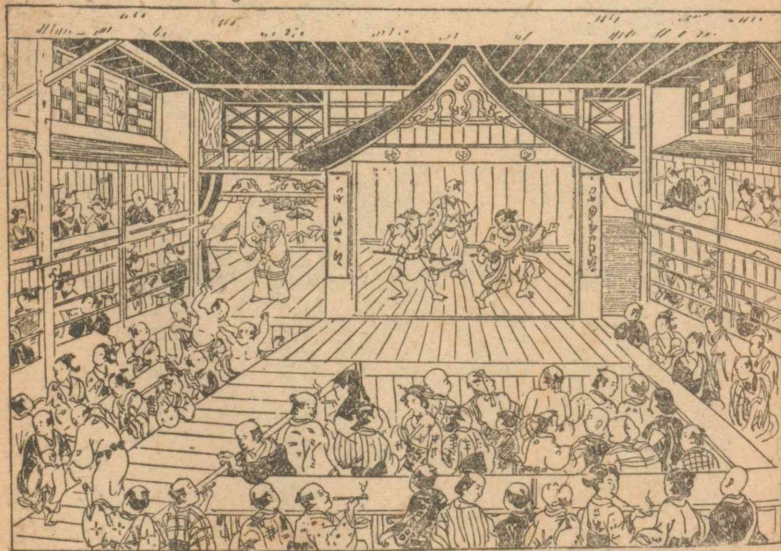


むかしの江戸の九段のふきんのありさま。まんなかにならんでいるのは、武士たちの家です。

ずらしい品物を手に  
入れてきたのでした。  
もつとも、今から三  
百年ぐらいまえ、外  
國にでかけることが  
ゆるされなくなつて  
からは、商人たちは、

せまい日本の國のなかだけで、かつやくすることに なります。  
しかし、國のなかだけだつたにしても、商業がさかんになれば  
なるほど、商人たちが住み、商人たちのかつやくする町は、ど  
しどしさかえていきました。大阪や江戸というよゆうな、大きな  
町が、このころからさかえて、日本の商業の大きな中心地とな

つていったのもこのためです。  
そのころ江戸の町の人々は、  
百万ぐらゐもあつたといふこと  
です。また商業のさかんな大阪  
は三十五万、ながいあいだみや  
このあつた京都は、四十万とい  
う人が住んでいました。このほ  
か、今のとかいは、たいていこ  
のころに大きくなつたものです。  
あなたがたの住んでいる町は、  
その時代にはどんなふうだつた  
でしようか。



しばいを見る江戸の町の人々。江戸や大阪のような大きな町では、こんなしばいがたいへんさかんでした。

いなかの人々―新しい村ができる―

にぎやかな町がたくさんできて、商業もたいへんさかんになつてきましたが、それにつれて、農業もさかんになり、あちこちに新しい村ができるようになりました。

いっぽう大名たちは、みやこの近くでも、いなかの方でも、自分のおさめている國をゆたかにしていくために、いろいろとくふうをしていました。

農業は、入々のたべものや、きもの材料などをつくるたいせつなごとです。そのうえ、このころは、米がおかねのかわりになつていたほどでした。ですから、大名のおさめている土地は、そこでとれる米の分量ぶんりやうであらわされて、なん万石まんせきというようによばれていました。武士たちも、大名から、おかねのかわりに、米をもらつてくらしていました。武士たちは、城下町に住んで、いなかの入々のつくる米をたよりにしてくらしていったのです。

そういうわけで、大名も武士たちも、とくべつに力をいれて、農業をさかんにしなければなりません。そこで、今までたがやされていなかかったあれ野や水けの多いひくい土地なども、どしどしかいこんされていきました。そうなる



新しく田や畑をつくっていくありさま

新しい土地に住みつく人もふえていきます。新しい村は、このようにして、あちらにもこちらにもつくられていったのでした。今の東京に近い、そのころむさしのとよばれていたあれ野が、今のように、かいこんされてきたのも、このころのことです。あなたの住んでいる地方に、新田あたという名まえのついでいるところがのこつてはいないでしょうか。そういう土地は、おもに、このころひらけていったところが多いのです。この新田のなかには、商人たちが、おかねをだして、いなかの人々にかいこんさせたものも、ずいぶんあります。

新しい土地が、かいこんされていったばかりではありません。いろいろな作物も、しだいにたくさんつくられるようになりました。紙をつくる材料になるこうぞ、美しいそめものをつくる



江戶の世の中の内なかの人々の家

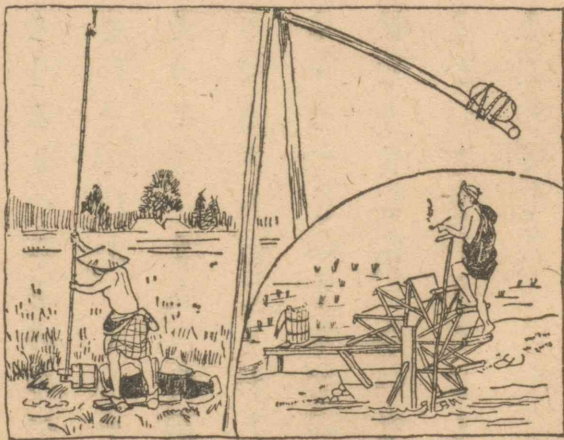
のにたいせつなあい・べにばな、きれいなしつきをつくるのにひつようなうるし、きもの材料になるあさ、そのほか、くわやちやなどもそうです。また、外国からつたわつてきたたばこ・わた・じやがいも・さつまいもなどの新しい作物も、たくさんつくられるようになりました。今いなかの人々のたいせつなしごとになっているかいこをかうことも、このころからたいへんさかんになってきたのでした。

また、畑しごとを使うべんりな道具も、くふうされました。みぞから水を田に入れるのにも、はねつるべ・ふみぐるまなど

が發明され、たいへんらくになりました。うしやうまが、畑しごとのてだすけに、廣く使われるようになったのも、このころからです。

このように、むかしにくらべると、新しい田や畑もふえ、村もひらけ、いなかの入々のしごとも、ずいぶんすすみ、田や畑のしゅうかくもましてきました。

しかし、そのくらしは、どうかというと、あいかわらずたいへん不自由なものでした。それは、武士たちが、いなかの入々のくらしのこまかいところまで、いろいろとさしずして、とり



これは、はねつるべやふみぐるまを使って、みぞから水を田にいれているところです。あなたがたの住んでいるいなかで、こんなものを使っているところはないでしょうか。

しまったからです。おひやくしようたちは、「米は、たべてはいけない。むぎ・あわ・ひえなどをたべろ。」きものは、もめんしかきてはいけない。「ぜいたくをしてはいけない。」などと、いわれていました。

こういうさしずは、村のかしらであるなぬし—ところによつては、しよやとよばれていました—から、村の入々につたえられたのです。村の入々は、五けんずつひとくみになっていて、そのなかのだれかがぜいをおさめることができないと、ほかの入たちがみんなでだしあわなくてはなりません。またそのうちのひとりでもわるいことをすると、五けんのものがいっしよにばつをうけました。こんなふうですから、村の入たちのくらしは、たいへんきゆうくつなものであったのです。

そのうえ、このころの世の中は、日本の國が、いくつかの小  
さい國にわかれていて、おたがいにたすけあつてくらしていく  
こともしていませんでした。ですから、大水やひでりがつづい  
て、田畑があれ、米がとれなくなり、人々がたいへんくるしん  
でいても、ほかの國が、助けるといふようなことはありません  
でした。

こんなわけで、いなかの人々は、  
町の人々とちがつて、たいへんくる  
しい生活をしなければならなかつた  
のです。



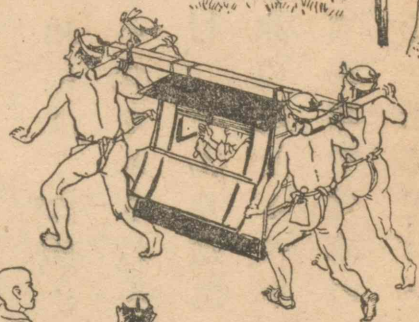
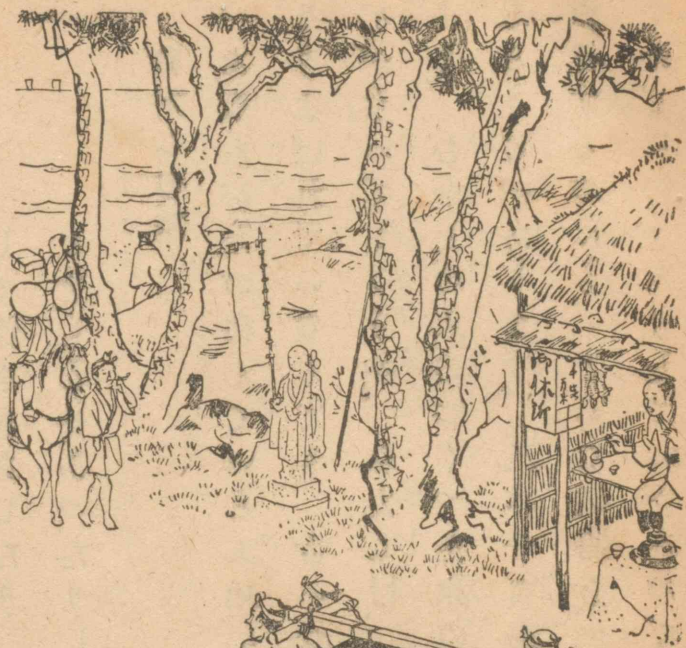
三、人々はむかし、どんなふうに  
してゆききをしたたり、ものご  
とをしらせあつたりしたか



### むかしの旅

あなたがたの住んでいる土地には、旧道きゅうどうとよばれる道路どうろや、  
そうよばれていなくても、古い松なみ木の長くつづいた道路な  
どがないでしようか。私たちは、そんな道路を歩いていくと、  
よく、むかしの人のつくった旅の道しるべや、一里づかなどを  
みることがあります。汽車や自動車や電車のなかつたむかしは、  
旅行するのにも、こんな道路を、わらじばきで歩いたり、うま  
やかごにのつたりしていったのでした。





まだ東京  
 が江戸とよ  
 ばれていた  
 今から百年  
 ぐらいまえ  
 までは、江  
 戸から大阪  
 に行くのに  
 も、東海道  
 とよばれて

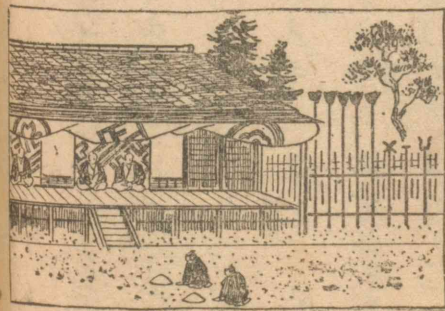
いた道路を、足にわらじをはき、かたに荷物をぶらさげたすが  
 たで、てくてく歩いていったのです。江戸と大阪のあいだは、

百二十里ぐらいいたい五百キロメートルありました。一  
 日に六里歩いたとしても、いきつくの二十日はかかるかんじ  
 ようです。いそぐときには、うまにのって走り、とくべついそ  
 ぐときには、ときどきうまをのりかえてかけつけましたが、そ  
 れでも、五日ぐらいはかかりました。女の人や、こどもや、足  
 のよわい人は、かごにのっていくことが多かったのですが、そ  
 れにはずいぶん高いおかねをはらわなければなりません。した  
 そのうえ、かごは、汽車のようにのりごこちもよくありません  
 し、ひとつのかごにずっとのりつづけていくというわけにもい  
 きませんでした。

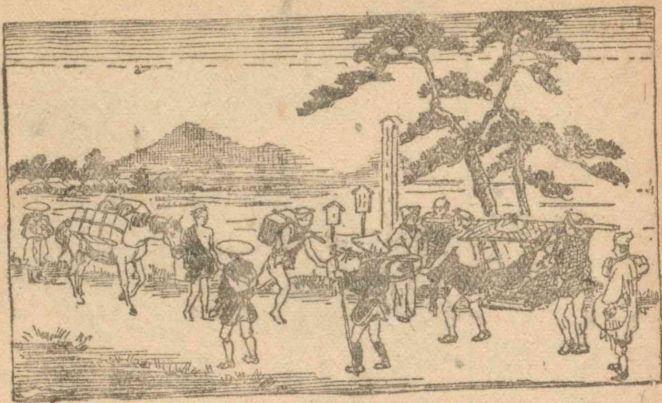
しかし、むかしの旅の苦勞は、のりもののふべんや遠い道の  
 りということばかりではありませんでした。武士たちが、おた

がいにあらそいばかりしあつていた、今から四百年ぐらいまえのころは、國のなかもみだれ、道路もたいそういたんでいて、ぬすびどがあちらでもこちらでも旅びどをおそいました。それに、ほうぼうに關所せきじょうというものがつくられていて、旅びどからも、商人の送つたり、はこんだりする荷物からも、高いおかねをとりあげていました。ですから、そのころの人々にとっては、長い旅にでかけるといふことは、ほんとうにいのちがけのしごとだつたにちがありません。

しかしそのうちに、世の中が平和になると、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康とくがわいさやすのよきな強い大名たちは、もつとらくで、

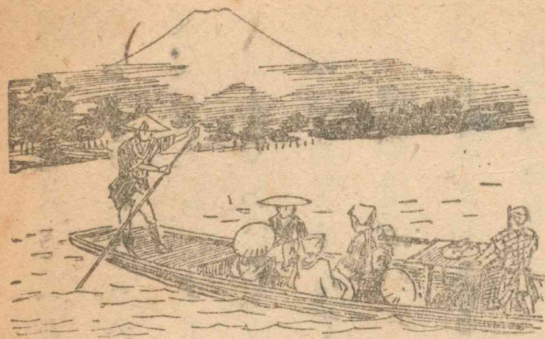


これは、江戸時代の關所です。そのまえはもっとそまつなものでした。

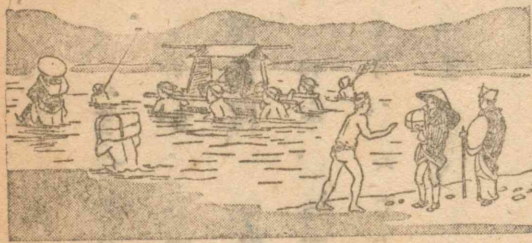


むかしの旅のありさま

あぶなくない旅ができるように、いろいろとほねをおりました。そして、まずはじめに、いたんだ道路をていれして、りっぱな道路をつくりました。江戸をもとにして、大きな道路がいくつもできましたし、いなかの方でも、そこに住む大名たちの方で、だんだんよい道路ができるようになっていきました。そういう道路のうち、とくに広いものは、道のはばが、五間ごま（十メートル）くらいのもあつて、両がわには、まつなどがうえられていました。そして、道の長さをしめすために、一里づかのような道



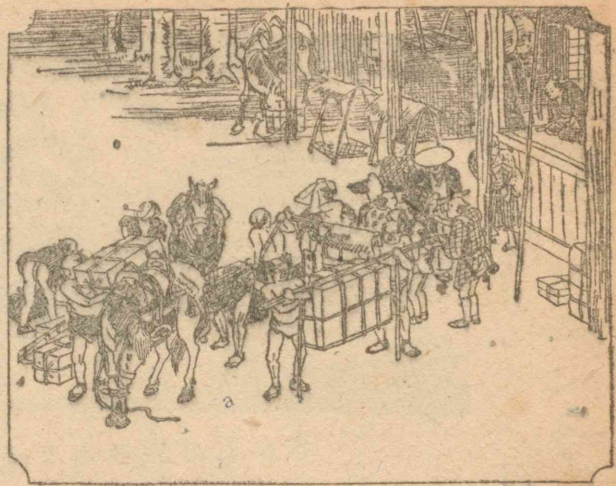
むかしのわたしぶね



むかしはこんなふうにかごにのったり、人のかたにのったりして川をわたりました。

まだそのころには、おかをきりひらいたり、トンネルをほったり、川にりっぱな橋をかいたりすることが、なかなかできませんでした。そのう

すくなくなりましたが、まだ箱根のように関所があつて、いちいち通行人をしらべていましたし、高いとうげをこえたり、一川を歩いてわたったり、人のかたにのつてわたったりすることを、たびたびしなければならなかつたからです。



これはむかしの宿場のありさまです。旅びとは、ここで休んだり、かごや馬をのりかえたりして旅をつづけました。

しるべがつくられました。こうして、だんだん道路がりっぱになつてくると、人々のゆききも、たいへん多くなります。そこで、旅びどのとまるやどや、うまやかごなどののりものを用意してある宿場が、だいたい二里か三里ごとにできてくるようになりました。

このようなわけで、旅行も、むかしにくらべれば、たいへんらくになつてきました。しかし、それでも、まだ思うように、そして、らくにゆききかできたとはいへませんでした。かずは

え、あちらこちらの大名は、ほかの土地とのゆききが、よくでき  
きるようになるのをきらって、自分のおさめているところの道  
路だけしか、よくしようとしなかつたのです。

こんなわけで、むかしの道路は、あまりりっぱにできていた  
とはいえませんでした。今、日本の道路が、ほかの國にくらべ  
て、道のはばがせまく、つくりかたもよくないのは、こんなと  
ころにもとがあるのかもしれない。

### 道のおこり

はじめ人々は、野山をかけまわり、けだものをつかまえ、木  
のみ、草のみをひろい、川やあさい海で、さかなをとったり、  
貝をひろったりして生活していました。人々は、すこしずつ、  
ばらばらにわかれてくらしていましたが、ほかの人々といつた

りきたりするひつようが、あまりなかったの、とくべつ道を  
つくるということはありませんでした。

しかし、人々が、野山をかけまわったり、たいせつなのみ水  
をさがすのに、いちばんべんりな通りやすいところを、いくど  
も歩いたりしているうちに、そこだけがふみかためられ、草も  
なくなつて、道ができました。いちばんはじめにできた道は、  
きつとこんなふうにしてつくられたものでしょう。

人々は、そのうちしだいに、田畑をつくり、おもに農業でく  
らしをたてるようになってきますが、そうになると、もう今まで  
とはちがつて、ひとつの土地に住みついて生活しなければなら  
なくなりません。そして、だんだんぶらぐができあがり、みんな  
で助けあつてくらしていくことがひつようになつてくればくる

ほど、ほかの人々とゆききをするこも、いよいよ多くなつて  
きました。

道は、このようにして、はじめは、ぶらくのなかで、ほかの  
家とゆききするためにつくられました。また、遠くにある田畑  
へたがやしにいくためにも、つくられました。しかし、そのう  
ちに、ほかのぶらくにいくための道もできるようになってきま  
した。なぜなら、農業をやつていくためには、みぞをほつて、  
田畑に水をひき、またいけをつくつて、水をためておくひつよ  
うがあります。こんな大しごとは、どうしてもほかのぶらくの  
人々とたすけあつて、やらなければできなかつたからです。こ  
うして、ぶらくとぶらくとのあいだにも、思うようにゆききが  
できるように、どんどん道がつくられるようになりました。



道をつくる人々

しかし、そのうちに、人々は、  
商業のおかげで、たいそうべんり  
な生活ができるようになってきま  
した。ほかの土地のめずらしい物  
と、自分の土地でできる物とをと  
りかえあつて、ゆたかなくらしを  
することができるようになったの  
です。しかし、品物をとりかえあ  
うためには、まずだいいちに、ほかの土地とゆききをする道が  
ひつようです。そこで、しだいに商業がさかんになり、世の中  
の人々が、おたがいにほかの土地の人々のつくるものにしたよつ  
てくらししていくようになる、道路もますますふえ、りっぱな

大きなものになっていきました。

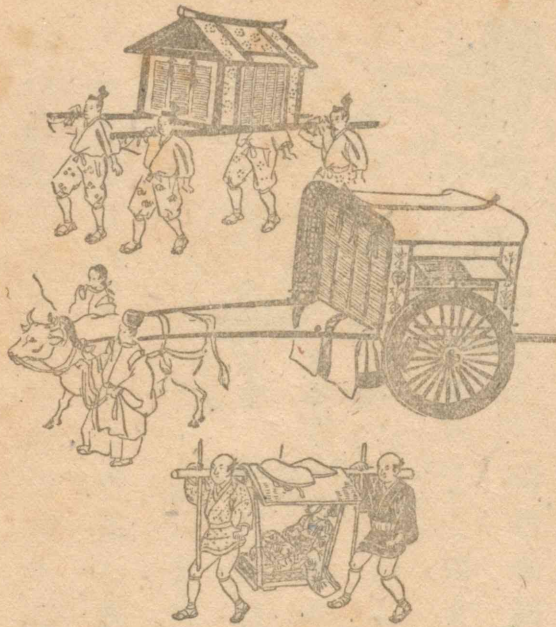
こんなふうにして、はじめは、人々がゆききをしているうちに、いつのまにかふみかためられてきた道も、しだいに人間の手で作られるようになっていったのです。

こんなわけですから、奈良にみやこのおかれたころには、日本の道路も、かなりよくなつてきていたと考えてよいでしょう。日本國じゆうどこへいっても、たいてい道路があり、そのうえところどころには、旅をする人々のためにとまるところもつくられていたといふことです。

### むかしののりもの

ずっとむかしから、人々がのりものに使っていたものに、うまがありました。野山でかりをするときにも、旅にかけると

きにも、身分の高い人々は、うまを使っていました。うまのほかに、かごやこしとよばれるものがありました。こののりもの



上は、人がかついだこし。中は牛車(そのころぎっしとよばれていました)。下はかご。

のは、入がかたにかついでいくものだったのだ、やはり、身分の高いでなければのれませんでした。そのうちに、入がかつぐかわりに、うしにひかせる牛車ぎゅうしゃもできてきました。

これもやはり、身分の高い人ののりもので、いっばんの人たちがのることのできるようなべんりなものではなかつたのです。

そののち、武士のあいだでは、うまをどんどんのりものに使  
うようになりました。そこで、はじめは身分の高い人だけが使  
っていたうまも、しだいにいつぱんの人たちが使えるようにな  
っていききました。そのころ遠い道をらくに早くいく方法は、う



上の絵は、いそぎの用事で武士が馬を走ら  
せているところ、下のは、荷物をはこぶ馬

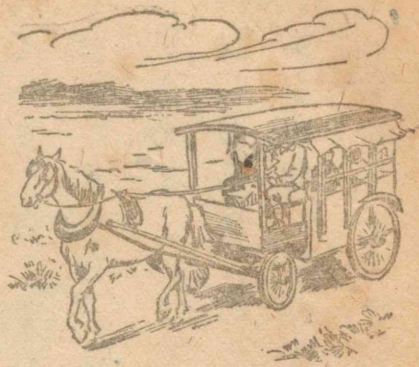
まにのるほかにはなかつたのです。  
けれども、むかしの日本では、  
馬車は、牛車のように、のりもの  
には使われませんでした。馬車を  
のりものとして使うようになった  
のは、今からやつと八十年ぐら  
い  
まへの明治の世の中になつてから  
のことです。これは、たぶん道路

がわるくて、牛車よりも早い馬車をうまく走らせるのはつご  
うがわるく、かえつてうまのせなかにつたほうがかべんりだつ  
たからかもしれません。荷物をはこぶのにも、うまに車をひか  
せて、それにのせるといふことをせず、せなかにくくりつけた  
ことが多かったのです。

外国では、むかしから、馬車が使わ  
れていました。それも、はじめは一頭  
でひいたものが、二頭、三頭、六頭と  
ふえたので、いくにんもの人たちが、  
一だいの馬車につけて旅行することも  
できました。これは、日本にくらべ  
ると、むかしからよい道路がつくられて



外国では、むかしこのような急行馬車が  
さかんに使われていました。



いなかののりあい馬車

ことのあるのりあい馬車がこのついでにだけだす。

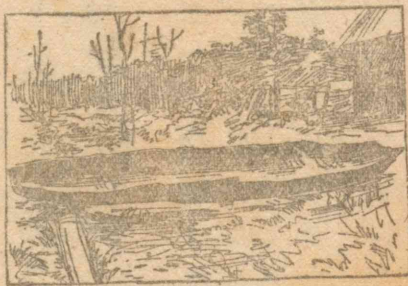
### 水の上の交通

船のはじまりは、うきだといわれています。人々は、草の葉や、木の板が、水にうかんでいるのを見て、かるいものは水にうかぶ、ということを知りました。そして、大きなまるたをうかべて、それにのることをおぼえました。まるたやたけやあし

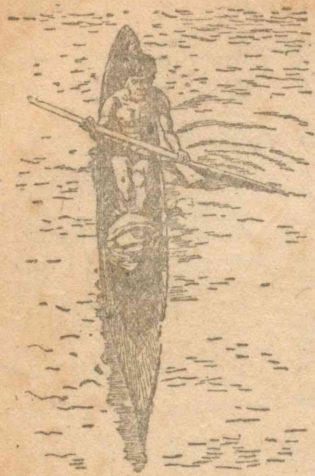
いたからでしよう。

日本では、明治になつてはじめて、馬車が使われたわけですが、そののちに、自動車がかんに使われるようになる、だんだんすくなくなり、今では、荷馬車のほかに、いなかで、たまにみかける

などをくみあわせると、のるのにつごうのよいいかだができてきます。しかし、いかだでは、水をかぶりやすくてこまるので、太い木のみきを切り、まるきぶねをつくりました。人がのるところは、深くくりぬいてつくったのです。人々が、いちばんはじめにつくった船は、こんないかだやまるきぶねでした。



千葉縣のいなかでほりだされた、日本の大むかしの人々の使っていたまるきぶね



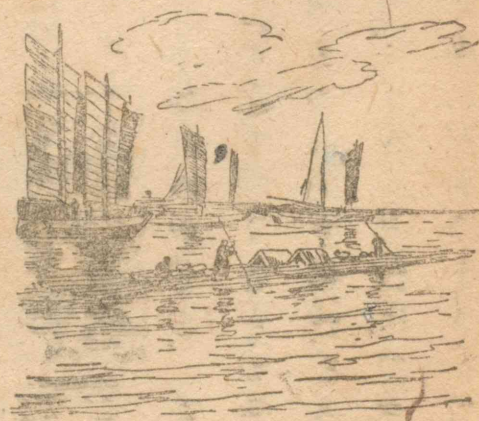
南のあつい地方に住む人とまるきぶね

しかし、今の世の中でも、こんなかんたんな船を使うこともあります。南のあつい地方に住む人々のなかには、まるきぶねのついで、島と島とのあいだをゆきさして



る人々もいます。また、中國の揚子江（Yangtze River）という大きな川では、いかだの上にはほをはつて、こやをつくり、川を流れく  
 だる人々もあります。

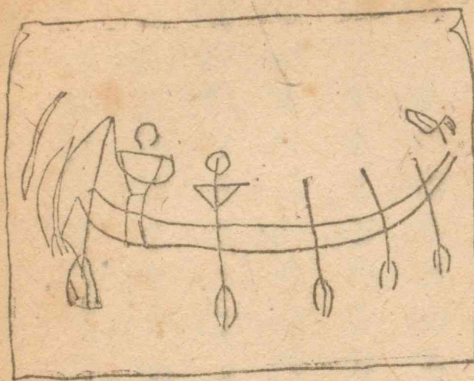
はじめのうち、川や海やみずうみは、人間が歩きまわるためには、たいへんつごうのわるいじやまものだったにちがいありません。しかし、いかだやまるきぶねが發明されてからは、かえつて、人々がゆききをするのにつごうのよいものになりました。



揚子江のいかだ

ことに大むかしの日本には、あちらにもこちらにも森があつたうえに、ぬまやいけも多くて、陸の上のゆききは、ぬかなか

むずかしかつたのです。ですから、船を利用して、川や海をゆききするほうが、かえつてべんりだったといつてよいでしょう。また、日本は、海にかこまれた島の多い國でしたから、人々は、ずっとむかしから、船にのつて海にでることに、よくなれていました。



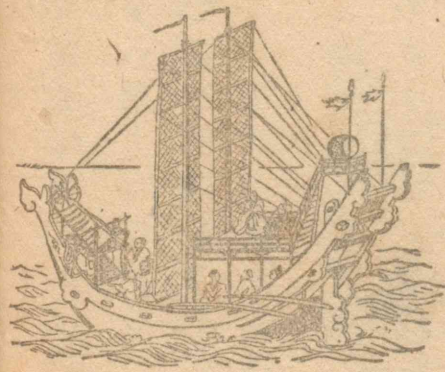
土のうつわにかかれた船をこぐ人々

この絵をみてごらんさい。人々は、まるきぶねのような大きな船にのつて、こいでいます。いかだやまるきぶねは、こんなふうにろを使つて、なんにんかの人々が力をあわせてこいだものでしょう。あさいところなら、もちろん、ぼうでおしながら、進んでいくこともで

きました。

しかし、ろでこぐばかりでは、とても長いあいだこぎつづけることができませぬ。そこで、人々が思いついたのは、風の利用することでした。船の上にはをはり、風のいきおいにおされながら、進もうというわけです。これならば、らくに長い旅をすることができます。遠い海のむこうの國々とゆききをするのに、むかしの人々は、長いあいだこのような船を使っていました。

しかし、風の利用する船は、もし風が、進もうとする方向に吹かなかつたら、動くことができません。

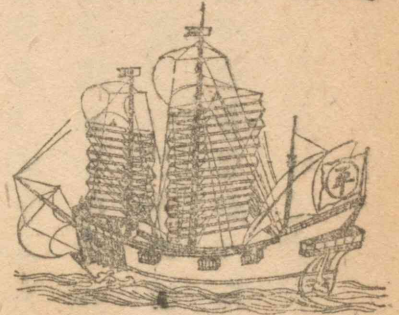
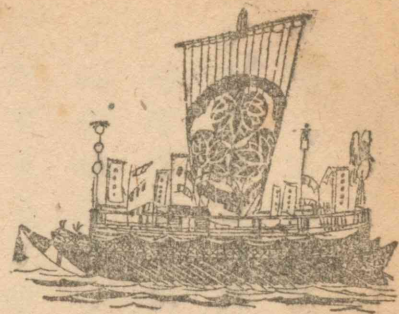


しかし、奈良にみやこのあったころ、  
中國の唐の國に使いにいく人々の使  
った船。

ですから、なん日でも、つごうのよい風の吹いてくるまで、じつとまたなくてはならないことも、しばしばおこりました。

今から、千三百年ぐらいまえ、新しいすぐれた學問をならうために、日本からはじめて、中國に使いがおくられました。このとき使われた船は、そのころのものとしては、たいへんりっぱな大きな船でした。しかし、それでも、ほをはるしかけなど、もじゆうぶんでなく、海をわたるあいだに、あら波にあつて、たいへんくるしい旅をしたということでした。そのうえ、日本の港をでるときには、つごうのよい風のふいてくるまで、なん日でもまたなければならなかつたのですから、たいそう日かずのかかる長い旅だつたわけです。

それからのも、日本から、大陸にむかつて、なんかいも使

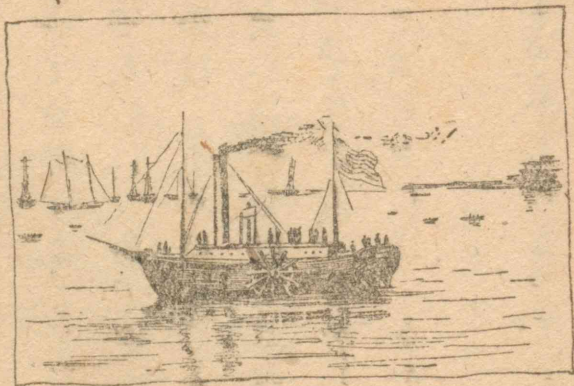


武士の世の中、大陸とのゆききや、いくさに使われた船は、おもにこんなものでした。

ばかりでなく、ろもいつしよに使うことが考えだされました。けれども、やはり、あの廣い海を、なにひとつたよりになるよ  
うなきかいてもない木の船でわたることは、たいへんくるしい、  
そしてあぶないしごとでした。

ほやろだけで大きな海をわたることがあぶなかつたのは、日本でも、外國でも、同じことでした。世界じゆうの入々が、

のために、思うようなゆききができなかつたのです。しかしどう、今から百四十年ほどまえに、アメリカのフルトンという人が、じょうき  
の力で、船を進ませる汽船を發明しました。この發明があつてから、海の旅も、  
みちがえるほど、早くて、らくなものになりました。



フルトンの發明したさいしよのじょうき船

しかし、私たちのそせんは、まえにもお話したように、三百年ほどまえから、  
外國とのゆききを止められるというようなことがおこつたため  
に、武士の世の中がかわりになるころまで、汽船を知りません  
でした。アメリカから、ペリーという人にひきいられて、四そ

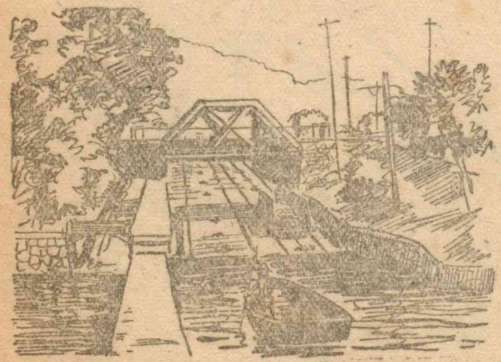
うのじょうき船が日本にやってきたとき、はじめてこのようなりっぱな船をみた人々のおどろきは、たいへんなものだったということです。

むかし、廣い海の上を長いあいだかかって旅行することは、たいへんくるしいしごとでしたが、海岸づたいに、船でゆききをしたたり、川にそつて船を進めたりするのは、それほどありませんでした。そのうえ、たくさん重い荷物をはこぶのは、船を使うほうが、ずっとらくでした。ですから、むかしから、米や、そのほかの品物を遠くまではこぶときには、さかんに船が利用されました。

ことに、武士の世の中になって、商業もさかんになってくると、いろいろな土地でつくられる物を賣ったり買ったりするところがさかんになります。船は、それをはこぶためになくはならないものでした。港には、荷物をあずかるくらもち、商人もたくさんあつまつて、そのあたりは、たいへんにぎやかな町になりました。

また外國とゆききをするのがとめられてからは、あちらこちらの大名たちは、船が通りやすいように川をつくりなおしたり、港を大きくしたり、ときには、新しく川をほつたりして、船が陸地のなかにまではいつてきて、つみおろしがべんりになるように、いろいろとくふうしました。

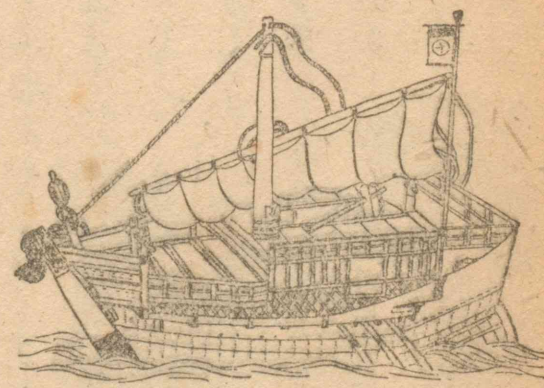
今では、川をのぼりくだりしている船



今、京都のふきんにあるうんが

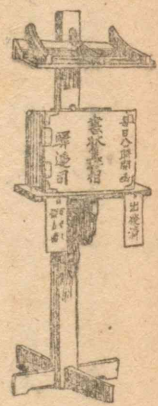
はあまりみかけませんが、むかしは、ずいぶん川を通る船が多かったものです。米のよくとれる土地などでは、川の出口にある港が、川上の方からはこばれてきた米を、どんどんつみだし、遠くに送ったりしたので、しだいにさかえるようになりました。

江戸と大阪とのあいだは、船のゆききも、とくにさかんでした。そこで、十いくつかのろをもち、米を千石もつむことのできる大きな舟もつくられるようになりました。



江戸時代に江戸と大阪のあいだで、荷物をはこぶのに、武士や商人たちにさかんに使われた船です。

むかしは、手紙をどういふふうにしてはこんだか



今では、ポストにさえいれれば、遠くに住んでいる人々のところへでも、かんたんに手紙をとどけることができます。いそぐときには、電ぼうをうったり、電話をかけたいたりして、用事をすますこともできます。そればかりでなく、ラジオをきいたり、新聞をよんだりしていれば、家のなかにすわったままで、日本はもちろんのこと、世界のいろいろな國のできごとまで知ることがができます。また、本をよめば、むかしの入のことも、遠い國に住んでいる人々のくらしのありさまも、くわしく知ることができます。

しかし、こんなに、べんりな世の中になつたのは、明治の新しい世の中になつてからのことでした。それまでは、遠くの人に用事をつたえたり、廣い世の中のことを知ったりするのは、たいへんこんななことでした。

大むかし、人々が、まだあちらこちらに、ぼつぼつと住んでいたときには、遠くはなれた人々がおたがいにゆききすること、めつたにありませんでしたし、また、用事をつたえあうひつようもありませんでした。

しかし、世の中がすすんで、なにかにつけて、ほかの人々とたすけあつてくらしでいかなければならなくなると、おたがいにゆききしあつて、自分の用事をほかの人々につたえることがひつようになつてきます。そして、このことは、世の中がすすめば、すすむほど、ますますたいせつなことになつてくるのです。

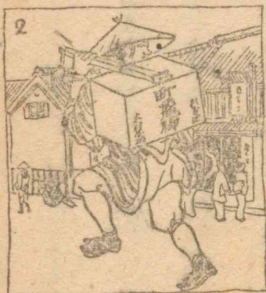
けれども、人々が、まだもじを使うことを知らなかつたころには、つたえたいことがあつても、自分でたずねていくか、それとも、だれかにたのんでつたえてもらうほかに方法がありませんでした。ですから、もし、自分でいくこともできないし、たのんでつたえてもらえるような人もみあたらなかつたら、それこそたいへんこまつたにちがいありません。

人々が、もじをかくようになつてからは、ぜひ話したいということができても、手紙にかけば、いちいちでかけないでも、あいてに用事をつたえることができるようになりました。ただ、

とどける方法は、たのまれた人が歩いてはこぶか、ときには、うまにのつてはこぶかするものがふつうだったのです。

今から、千三百年ぐらいまえ、奈良のみやこと遠いなかとのあいだのゆききをべんりにするために、道路がつくられました。そして、そのとちゆうのところどころに駅をつくって、うまの用意をすることになりました。これはそのころ中国でやっていた方法をとり入れたのです。こうして、たいせつな國の用事のしらせや身分の高い人の手紙は、遠くの地方まで、どんどんとどけられるようになります。そのうちに、武士の世の中になると、ひきやくといって、手紙をせんもんにはこぶ人もでてきます。しかし、ひきやくを使うことのできたのは、やはり身分の高い人々や、武士たちだけで、ふつうの人々にはできなかった。

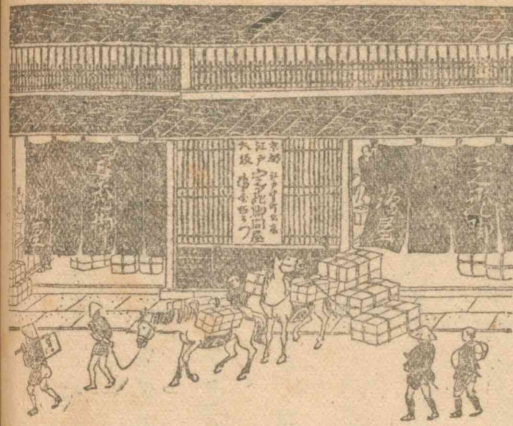
しかし、商業が、だんだんとさかんになって、人々のゆききもはげしくなってくると、遠くにはなれて住んでいる人々と手紙のやりとりをすることが、ますますひつようになってきました。



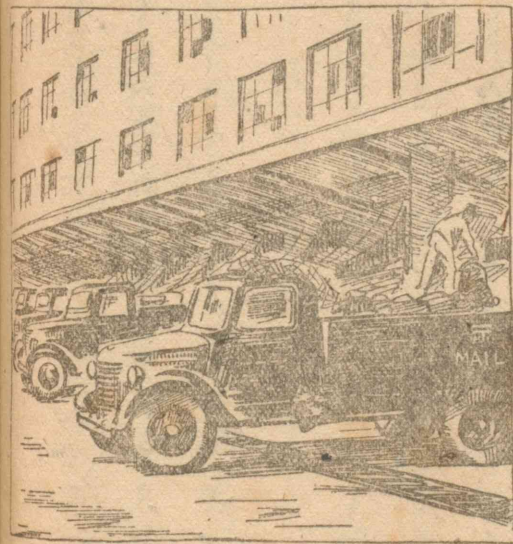
1. しょうぐんの手紙をはこぶ「つぎひきやく」とよばれる人  
2. ふつうの人々の手紙をはこぶ町びきやく

しょうぐんが江戸にいて、日本じゆうをおさめていたころ、大名たちは、それぞれ自分のひきやくをもつていて、自分たちのいそぎの用事を果たしていました。それとともに、いっ

ばんの人々も、同じように、ひきやくを使うようになりました。それは、町ひきやくとよばれて、まい月三かい、大阪と江戸とのあいだをゆきましました。日かずは、ふつう六日ぐらいかかったということです。これは、はじめ、江戸・京都・大阪の



江戸時代のひきやくの店のありさま。ちようど馬に荷物をつんではこんでいくところです。



これは、今のゆうびんきょくのありさまです。トラックがではいりして、荷物をはこんでいます。

あいだにだけできたのですが、しだいに、日本国じゆうにひろがっていききました。

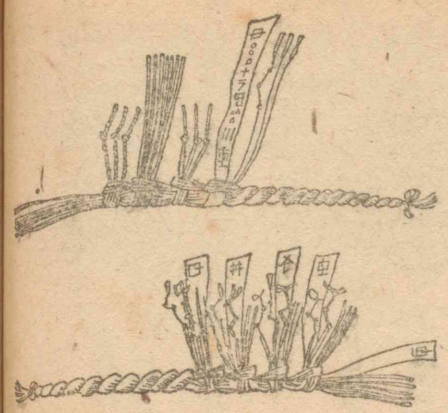
たとえば、江戸に住んでいる人が手紙をだそうと思うときは、手紙におかねをむすびつけて、きまつた場所においてあつた大きなかますに入れておきました。まいにち、夕がたになると、ひきやくがそれをあつめて、あてなの土地にとどけてくれます。とどけられた町では、ひきやくのまえに、ずらりとならべておいて、心あたりの人が受けとるのを待っていました。明治の新しい世の中になるまで、日本では、だいたいこんなふうにして、手紙をだしたり、受けとったりしていたのです。

もじは、どのようにしてできたのでしょうか

大むかしの人々は、ことばは使っていたので、話しあうこと



にはこまりませんでしたが、もじを使うことを知らなかったの  
 で、たいへんふべんでした。たいせつなことがらも、かきとめ  
 ておくことができないので、すぐわすれてしまいます。せつか  
 くよいことを思いついても、わすれてしまうことが、しばしば  
 あつたのです。

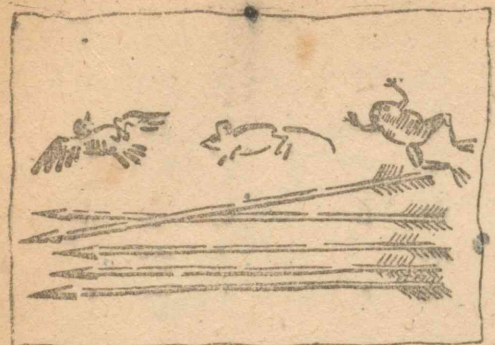


これは、沖繩の人々がむかし使っていたといわれているなわのもじです。なわをこのようにいろいろくみあわせて、思い出す手がかりにしていたのです。

そこで、人々は、わすれたと  
 きにも思い出すことのできるよ  
 うに、なにかたすけになるもの  
 をつくりたいと考えました。そ  
 こでひもやなわをいろいろなふ  
 うにむすび、とくべつなかたち  
 をつくったり、木にきざみぬを

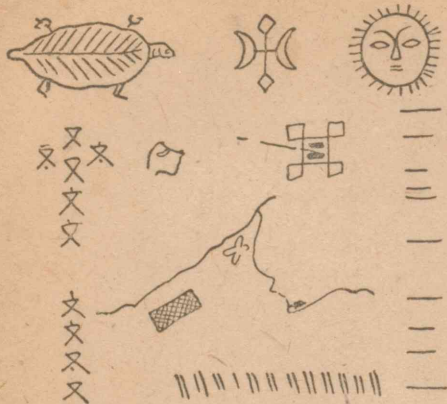
つけたりして、思い出すときのたすけにしてみました。今でも、  
 もじを知らない人々のうちには、こんな方法を使っている人も  
 いるということです。

それに、もうひとつ、たいへんふべんなことがありました。  
 それは、まえにもお話ししたように、遠くはなれている人々の



外国の大むかしの人々が、ときに送った絵の手紙です。"とり・ねすみ・かえるのようなまねができないならば、われわれと、いくさをしなければならぬ。そのとき、戸つと、矢でいころしてやる"といういみだということです。

ところに、なにかを知らせたいと  
 思うときです。とくに、ほかの人  
 に知られたくないことは、どうし  
 ても自分でいって話さなければな  
 りませんでした。けれどもそのう  
 ちに、人々は、絵やいろいろなし  
 るしをかいて、それをいろいろに



エジプトの絵むじ

- ☉ ..... 太陽日
- ☾ ..... 月
- ☼ ..... 光
- ★ ..... 星神
- ☰ ..... 天空
- ☿ ..... 夜
- ~~~~~ ..... 水
- ☔ ..... 雨

メソポタミアの絵むじ

- 🐟 ..... 魚 (さかな)
- 🦅 ..... 鷲 (とび)
- ☼ ..... 星 (ほし)
- ⋯⋯⋯ ..... 山 (やま)
- ~~~~~ ..... 水 (みづ)
- ..... 矢 (や)
- 🔪 ..... 殺 (ころす)
- 🗡️ ..... 矛 (ほこ)

かんじのおこり

- ☉ ..... 日 (たいようのあかり)
- ☾ ..... 月
- ~~~~~ ..... 川 (川や水のあはれ)
- ..... 上
- ..... 下
- 👁️ ..... 見 (はめてみよといふ)

インディアンの絵むじ

アメリカに住んでいたインディアンが今から 1890 年ほどまえに、そのころアメリカに住んでいたイギリス人をおそって、たたかいかつたときのことを、かいた絵むじです。どういふみなのかわかりますか。

たいようの下にあるよこせんは、六日かんと四日かんの二かい、せめよせたということです。まんなかの二本のせんは川で、そのうえは、イギリスのおしるをせめたということです。左のほうにあるのは、てきのころされたものが六人。ほりよになったものが四人というみだといわれています。下のほうのななめのせんは、たたかいにいった 2, 3 人のへいたい。絵の左の上にあるかめは、「がいせんした」ということだろうといわれています。

くみあわせ、あいてにそのいみをわからせるといふ方法を考えだしました。しかし、絵やしるして、用事をわからせようとす  
 るのは、なかなかむずかしいことです。くわしいことはかけな  
 かつたでしようし、よむほうで、まちがうことも多かつたこと  
 でしょう。  
 けれども、人々は、こうして絵で手紙をかいているうちに、  
 たいそうかわつたもじをつくりました。それは、絵のもじです。  
 人間がはじめてつくつたもじは、このような絵もじだといわれ  
 ています。ヨーロッパでも、中国でも、さいしよにつくられた  
 もじは、みんな絵もじやいろいろのしるしのもじでした。  
 絵もじは、このように、今から、ずいぶんむかしにできたも  
 のですが、アメリカに住んでいるインディアンなどは、わずか

二百年ぐらいまえにも、こんなもじを使っていたという事です。

### かんじとかな

中國では、はじめにつくられた絵もじが、長いあいだ使われていたうちに、だんだんかたちかとのい、もじらしいものになつていきました。そして、「かん」という國のころには、今私たちが使っているのと、ほとんどかわらないかんじがつくられるようになりました。そして、そのかんじが、まだもじを知らなかつた日本の大むかしの人々のあいだにつたわつたのです。

そのころ日本の人々には、そせんのいさましてがらばなしや、そのほか、いろいろのものがたりがたくさんつたわつていました。そして、まだもじがなかつたころには、とくべつにものおぼえのよい人が、それをいちいちあんきしていたのでした。かりのあと、かちいくさのあと、おまつりの夜などには、そのようなものがたりが、ひとばんじゆう、話しつづけられたという事です。

しかし、もじというべんりなものがつたわつてくると、人々は、すぐもじを使つて、そのようなものがたりをかきあらわしはじめました。そして、しだいに歴史や地理の本や、そのほかさまざまな本がかきのこされるようになりました。

しかし、かんじをおぼえても、それだけですぐに、日本のことばがすらすらとかけたわけではありません。かんじはもともと、中國のことばをかきあらわすためにつくられたものですから、日本のことばには、なかなかうまくあてはまりません。で

すから、人々はだんだんかんじを使うことになれてくると、かんじをうまく使つて、日本のことばをそのままあらわそうと、くふうするようになりました。そして、かんじだけだったりないところは、新しいもじをつくつておきなおうと考えました。私たちが、今かんじといつしよに使つているかなは、このよう

な (安から) ああああ

が (以から) いはいはい

ら (知から) ちちちち

ひ (奈から) ななななな

な (阿のBから) ナナナナナ

か (伊のイから) イイイイ

た (江から) ハハハハハ

か (加から) カカカカカ

苦心のあげくにつくられたものです。

かなのうちで、かんじをかんだんにかいてつくつたものが「ひらがな」、一部分をとつてこしらえたものが、「かたかな」です。

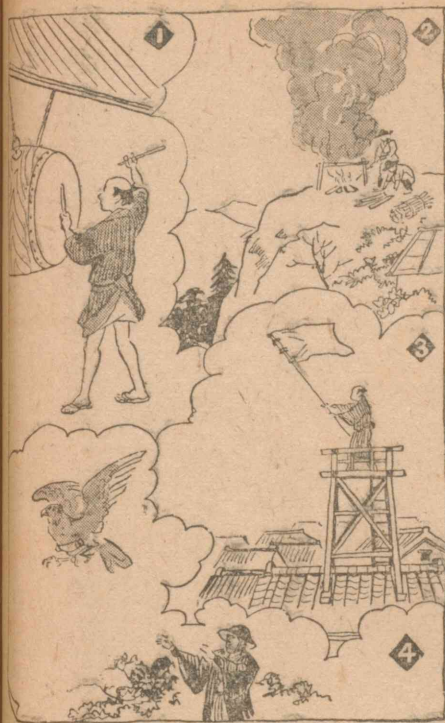
こうして、かなができてから、

日本の人々は、話したり、きいたりすることばを、すつかりそのまま、かきあらわすことができるようになりました。そのうえ、かなは、かんじにくらべてかすがすくなく、おぼえるのも、たいそうべんりです。かなができてから、本をよんだり、手紙をかいたりすることのできる人のかずも、どんどんふえていったにちがいありません。

のろし、たいこ、はたーいろいろな通信の方法ー

どんなにいそいで走つても、また、うまがどんなにはやく走つても、今の世の中にある電ぼうや電話のように、すぐに、用事を知らせるといふわけにはいきません。しかし、むかしの人も、いくさのとき、てきがせめよせてきたりしたときなど、なんとかして、はやく知らせたいと思つたことでしよう。

むかしの人は、そのようないそぎのときには、のろしやたいこやはたなどを、あいずとして使うことが多かったのです。あいずは、のろしのけむりがあがったら、「てきがせめてきた。」はたをふつたら、「ここはきけんだ。」たいこをつづけてならしたら、「いそいでおしろにあつまれ。」というように、まえからきめて



1.たいこであいずする。2.けむりをあげてあいずする。3.やぐらからはたをふる。4.たかをとばして手紙をはこぶ。

おきました。もちろん、のろしやたいこやはたのあいずは、いくさのときばかりでなく、ふだんにも、いろい

ろに使われていたことでしよう。

しかし、あまり遠くはなれたところでは、たいこやのろしの音をきくことも、はたやけむりをみることも、たいへんむずかしくなります。ですから、せつかくのろしや、たいこや、はたを使っても、遠くはなれたところにあいずする役にはたたないわけです。外国でも、むかしは、この方法を使っていたようですが、ふべんなことが多いので、はとをならして、手紙をはこぼせるという方法を使った人々もありました。日本では、はとを使った人はいりませんが、よくかいならした、たかを使った人々があつたということです。



四、どんなふうにして、今のようになんり  
な世の中になつたか。

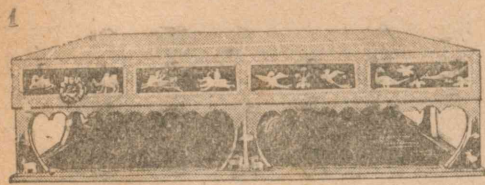
### 外國とのゆきき

今まで、なんどもお話ししたように、人々は、はじめ、あちらこちらの土地に、すこしずつばらばらにわかれて住み、くらしにひつようなものは、たいてい、自分たちでつくつていました。ですから、ほかの土地の人々とゆききすることも、あまりありませんでした。

しかし、そのうちに、人々は、しだいに、もつとほかの土地とゆききして、おたがいに、たりないものをもらいあつたり、べんりなくらしのしかたをならつたりしたら、もつとよい生活ができる、ということに気がついてきました。

そして、このことは、世界のどこの國の人々もおなじでした。はじめのうちは、近くの土地に住む人々のあいだだけで、ゆききをしていましたが、そのうち、もつと遠い土地の人々とも、ゆききをするようになってきました。そして、大きい海をこえたむこうの土地の人々、高い山のむこうがわに住む人々、廣いさばくのあちらに住んでいる人などともゆききして、くらしにどうしてもひつようなものや、めずらしいもの、べんりな道具などを手にいれたり、ゆたかなくらしのしかたをならつたりするようになりました。

このように、人々は、自分たちのくらしを、ゆたかでべんり



今から 1200 年ぐらいまえにつくられた奈良の正倉院しょうそういんというたてものには、そのころの身分の高い人々の使ったりっぱな道具がのこされています。それは、からだにつけるかざりや家具・しょつき・びわやことなどの楽器・刀・おりもの・ふでやすみなど、今、私たちがみてもおどろくほど美しいものばかりです。この絵にあるのは、

(1), びん (2), と (3), は水をいれるびん (4), ガラスのつぼ (5), すすり (6), しゃくのかたちをしたこうろ (7), 火ばち (8), びわ (9), 物さし

かいこをかうこと、はたをおること、家をたてたり道具をついたりすること、さけをつくること、かわらをつくることなど、のすすんだ方法や、そのほか、もじをはじめとして、いろいろな学問がくもんや佛敎ぶつこうなどが、つぎつぎに大陸からはいつてきました。



港にいる船とにぎあう町の人々

としが知らなかつた人々が、金ぞくの道具や、お米をつくる新しい農業の方法を知るようになったのも、大陸の人々とゆききをするようになってからのことです。

そののち、大陸とのゆききがますますさかんになるにつれて、

なものにするために、すすんでほかの國々の人ともゆききをするようになったのです。もうあなたがたが、知っているように、日本の人々は、ずつと大むかしから、大陸の人々とゆききをしていました。はじめ、石や木の道具や、かんたんなはたけしご

こうして、日本の人々の生活は、しだいに中國におとらぬくらいべんりな、ゆたかなものになっていきました。

武士の世の中になって、商業がすこしずつさかんになると、しだいに商人が活やくするようになってきます。なかには、すすんで外國とゆききをする人々もでてきました。それらの人々は、日本のなかでも、大陸に近い西の方に住んでいる大名たちや、いちぶのとくべつな商人たちでした。大陸の人々とゆききして、商費をすれば、たいへん大きなもうけがあつたからです。

このようにして、船も大きなものがつくられるようになり、港もだんだんりっぱなものができてきました。そして、中國や朝鮮（朝鮮）の人々とゆききするばかりでなく、南の遠い土地の人々の

ところにも、はるばるでかけるようになりました。

しかし、そればかりでなく、そのうちに、ヨーロッパ人が、遠い海のむこうから日本にくるようになりました。



ヨーロッパの人々が、日本にきたときのありさまです。

ラング人やイギリス人なども、やってくるようになりました。

これらの人々は、おもに、ぼうえきをするためにきたのですが、なかにはキリスト教をひろめるためにきた人々もありました。しかし、いっぽうでは、日本人のなかにも、すすんで遠い外





九州の大名からつかわされた少年たちが、はるばるローマにいったとき、たいへんかんげいされました。この絵は、そのときのありさまです。

國まででかけようとする人々が、どんどんふえてきました。なかには、はるばる、ヨーロッパのローマまで使いにいった十五、六さいの少年もあつたほどです。

このように、日本の人々も、遠い海に船をのりだして、世界の人々とゆききをするのができるようになったのでしたが、ざんねんなことに、しばらくすると、そのころのしょうぐんのめいれいで、外國にでかけることがとめられてしまいました。外國人も、オランダと中國の商人のほかは、日本にくることを

とめられてしまいました。

こうして、日本は、世界の國々とはなれて、ひとりぼっちになつてしまいました。このために、外國の人々のくらしが、ほとんどんべんりになつていくようすも、あまり知ることができませんでした。

このようなひとりぼっちのありさまが、二百年あまりつづきました。しかし、今から八十年ぐらいまえに、武士の世の中がおわつて、新しい明治の世の中になると、だれでも思うように外國へいくことができるようになりました。外國とのゆききも、明治になるすこしまえから、すこしずつはじまつていきましたが、明治になつてから、きゆうにさかんになりました。日本の人々が知らないでいるあいだに、外國では、いろいろな發明や發見

があつて、人々のくらしは、たいへんべんりになつていましたし、学問なども、ずっとすすんでいました。そのことがわかると、日本の人々はたいへんおどろいて、大いそぎで、そのべんりなくらしのしかたや、すすんだ学問などを、とりいれようとなりました。

それでは、明治になつてから、世の中は、どんなふうにべんりになつてきたでしようか。

### 新しい政治

長いあいだつづいた武士の世の中では、武士が、いちばん身分の高い人だときめられていました。武士のつぎには、農業をする人、それから、だいくなどのしよくにん、さいごが商人というじゆんじよでした。しかも、農家に生まれた人や、しよくにんや商人の子は、どんなにほねをおつても、めつたに武士になれませんでした。人々はみんな、自分の生まれた家のだいたいのしごとを、おやから受けついでいくようにきめられていたのです。

そのころ、江戸とよばれていた今の東京に、大名のかしらがいて、日本國じゆうをおさめていました。しよくぐんというのは、このかしらのことで、日本の國をいくつにも分けて、そこに、けらいの大名たちをおき、それぞれその土地をおさめさせていました。そして、その大名の下には、またけらいの武士がつかえていました。

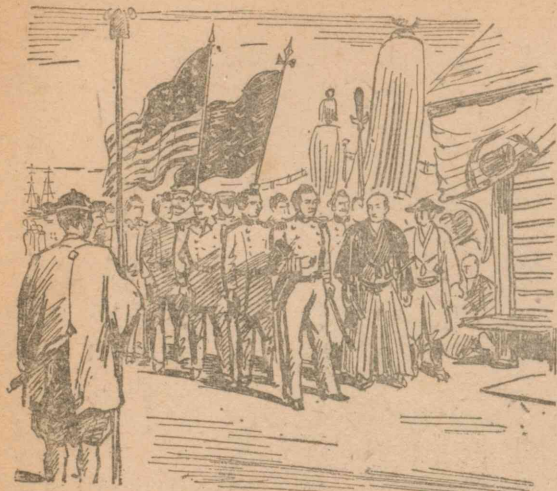
どの村にも、なぬしとか、しよくやとかよばれる人がいて、大名のめいれいを入々につたえたり、ぜいをあつめたり、その

ほか、いろいろなとりじまりやせわをしていました。なぬしや  
しようやは、さむらいではありませんでしたが、やはり、だ  
いたい、それになる家がきまつていて、だれでもなれるとい  
うものではありませんでした。

あなたがたが大きくなつても、もし武士の世の中のように、  
おとうさんのしごと以外のことをしてはいけな、ときめられ  
たらどう考えますか。ずいぶんきゆうくつだと思つてし  
よう。明治の新しい世の中になつて、政治のしかたがすつかりか  
わるど、こんなわけのわからない、ふべんなきまりは、ど  
んどんやめられるようになりまし。そして、どんな家に  
生まれた人々でも、思つうようにすきなことがやれるよう  
になりました。武士といつうとくべつな身分もなくなりました。  
長い刀をこし

にさしていばつていた武士は、もうどこにもみられなくな  
りました。これまで、身分の高い人のほかは、もつことので  
きなかつた、みようじ(せい)も、だれがつけてもよいこと  
になりました。しようぐんや大名はなくなつて、新しい政  
府ができた。たぐさんの縣がもうけられて、それぞれ役人  
がおさめることになりました。町や村でも、なぬしやし  
ようやのかわりに、新しく町長や村長ができました。そ  
して、みんなてえらんだ人々が、町や村のいろいろな  
ことを、そうだんしてきめるようになりまし。日本  
の國にはじめてぎかいができた。いっばんの人々の考  
えが政治にとりいれられるようになったのは、明治二十  
三年のことです。

しかし、このように新しいすすんだ政治がおこな  
われるよう

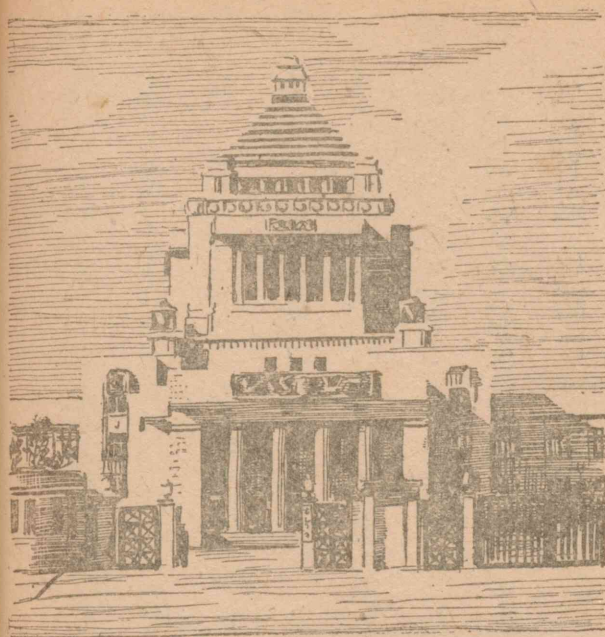


ペリーが日本にきたときのありさま

のしかたを、もっとよいものにしていくこともひつようになつてきたのです。こんど新しくつくられた憲法では、人々の生活を、今までより、もっと自由でしあわせなものにするために、いろいろなきまりがつくられています。

### 新しい生活

まえにもお話ししたように、今から、百年ほどまえに、はじめて、アメリカのぐんかんが四せき、ペリーという人にひきいられて、今の横須賀市の浦賀のおきに来たときには、人々のおどろきはたいへんなものでした。これまでにみた



これは、国会ぎじどうです。ここで、せんきよでえらばれたぎいんたちが、いろいろと政治のそうだんをするのです。

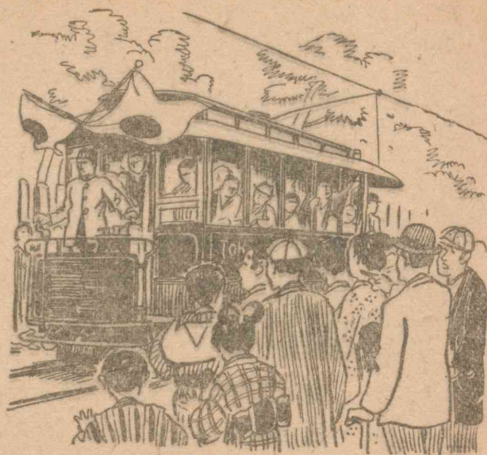
せんそうがあつて、そのたびに、ふしあわせな人もできました。また、いくら働いても、びんぼうで、たのしくくらすことのできない人もたくさんありました。それで、明治になつてはじめられた新しい政治

こともない大きな船が、けむりをはいて走るありさまは、きつ  
とおそろしいかいぶつのようにみえたことでしょう。

明治の世の中になって、世界の國々と自由にゆきまきてきるよ  
うになると、いろいろなめずらしいもの、べんりなものが、ど  
しどし日本の國にはいつてきました。

これまで、遠い土地へ、いそぎの用事をつたえようとする  
ひきやくを夫いそぎで走らせたり、うまをとばしたりして、そ  
れでもなんにちもかかりました。それが、電信デンキというべんりな  
ものができると、わずか二本の電線でんせんをひいておくだけで、すぐ  
むこうに通じるようになりました。ですから、それを見ておど  
ろいた人々は、電信のことを、はりがねだよりとよび、電線に  
は、人の血がぬってあるのだと、まるでまほうのように、

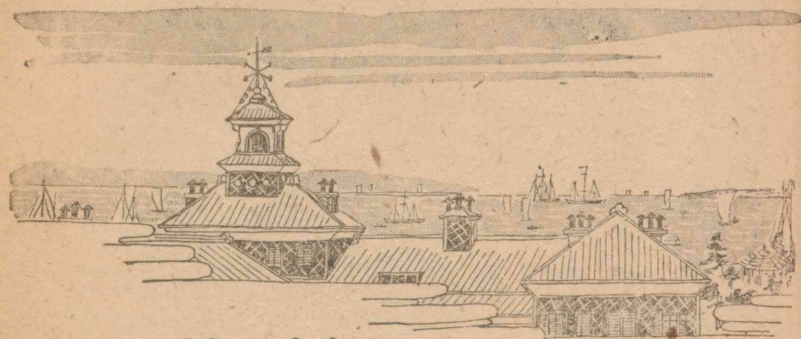
こわがったという事です。



はじめて電車が走ったとき、人々の  
おどろいているありさま

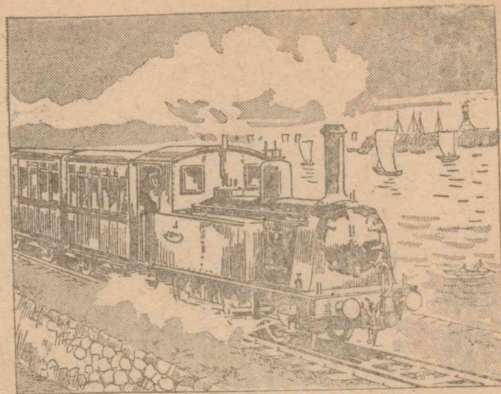
はじめて、こんなべんりなきか  
いを見て、おどろいた人々のなか  
には、さいしょそれをこわがって、  
使うことにはんたいする人もいま  
したが、だんだんなれてくると、  
こんどは、だれもがすすんで、そ  
れをとりいれようとなりました。

人々が、さいしょおかしようきとよんで、めずらしがった汽  
車は、明治五年にはじめて動きました。そのときは、東京と横  
浜よこはまのあいだを通っただけでしたが、それから三十五、六年もた  
つと、日本のはしからはしまで、鉄道が通じて、北は青森あおもりから、

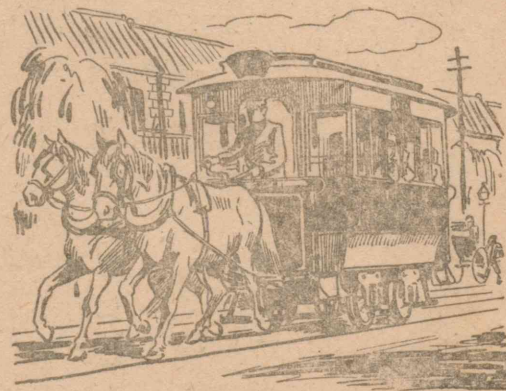


明治の世の中のごくはじめのころの人々のありさまです。

の上を、二頭のうまがひいて走るものもあらわれました。しかし、そのうち外国から電車や自動車がいってくると、鉄道馬



明治五年に横浜と東京とのあいだに使われたいちばんはじめの汽車です。



鉄道馬車

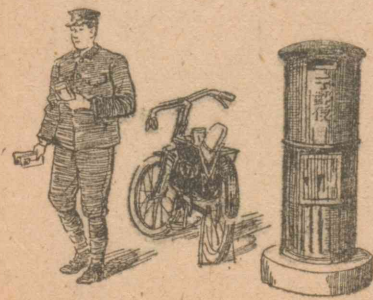
そのほか、のりものとしては、かごのかわりに、馬車や人力車が使われるようになり、とかいは、こーいうのりも

南は鹿兒島まで、汽車にのっていくことができるようになりました。

車もなくなり、ふつうの馬車や人力車も、あまり使われなくなりました。

電信は、汽車ができるよりまえの、明治二年から通じるようになりしました。それも、はじめのうちには、汽車と同じように、東京と横浜とのあいただけでしたが、それから十年もたつと、日本の國のおもなところには、どこへでも通じるようになりしました。

人々は、このようなべりなきかばかりでなく、外國のすすんだ生活のしかたも、どんどんとりいれました。洋服は、



今のゆうびんきょくとポスト

はじめは、政府の役人や、いちぶの人々しかきませんでした。したが、だいにきる人がふえていきます。西洋ふうのたてもものも、だんだんできていきます。西洋りょうりをたべることもさかんなったので、これまで日本の人々がたべなかつたうしにくも、しだいにたべるようになりました。

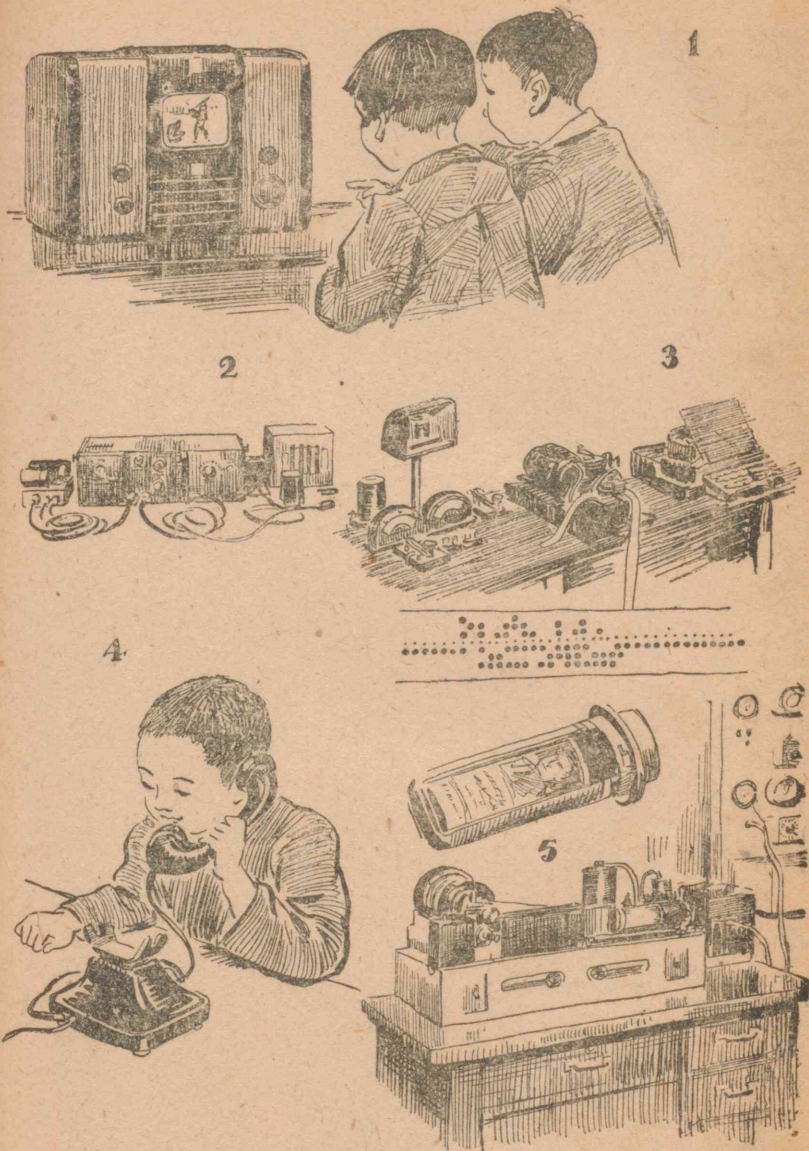


はじめて、銀座に電とうがついたとき、人々がみてたいへんめずらしがったありさま

また、これまであかりといえば、おもに、ろうそくやあんどんでしたが、明治になると、まず外國で使われていたガスとうがとりいれられ、そのうちしだいに、石油ランプがひろまってきました。あかり電とうが、はじめて、東京の

銀座どおりにともるようになったのは、明治十五年のことでした。アメリカで電とうが発明されてから、わずか五年ののちのことです。このころの人々が、外國のべんりなものを、どんなに大いそぎでとりいれようとしていたか、よくわかるではありませんか。それから十年もたつと、いっばんの人たちの家でも、ガスとうや、ランプのかわりに、電とうをつけることができるようになりました。

こんなべんりなものや、すすんだ生活のしかたは、はじめのうちには、おもにとかいの人々や、おかねもちだけがとりいれていたのですが、そのうちしだいに、いっばんの人々のあいだにもとりいれられるようになってきました。



(1), テレビジョン (2), ぎょぎょうに使うむせん電信 (3), ゆうびんきょくなどで使っているむせん電信 (4), 電話 (5), 電気の方で写真を送るきかい

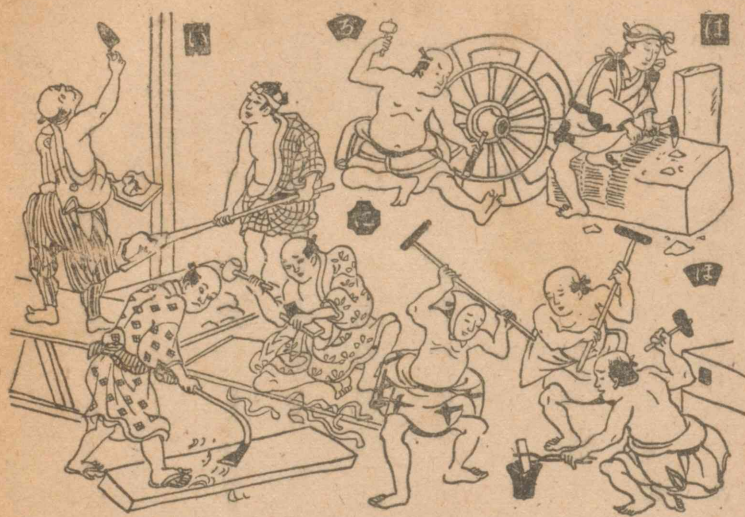


大きな工場

まえに商業のところで話したように、大むかしの人々は、ひつような道具は、めいめい、自分でつくっていました。しかし、そのうちに、道具つくりをせんものしごとにする人々もでてきました。

はじめのうちは、そのようなしよくにんたちも、身分の高いくげたちや、寺や神社（いんじや）にやとわれて、そこで、主人たちのためにひつようなものをつくっていたのでした。

しかし、商業がだんだんさかんになり、人々がいろいろな品物をほしがるようになる、しよくにんたちは、こんどは、主人以外のいっばんの人々のちゆうもんも受けて、道具をつくり、広く賣りだすようになりました。しよくにんたちは、そうすれ



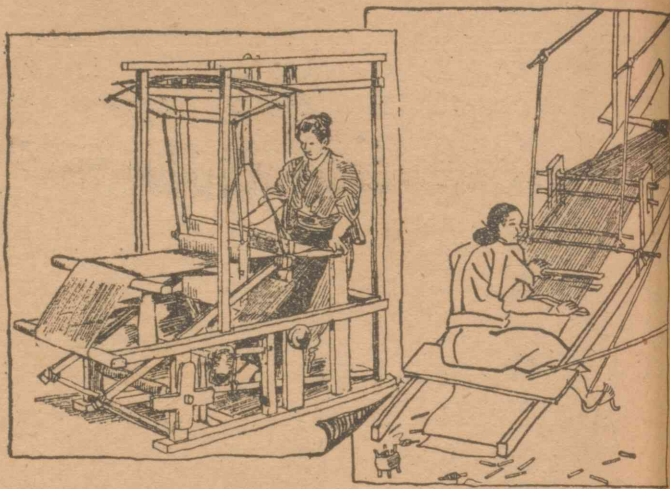
むかしのしよくにん (イ), さかんや (ロ), 車をつくる人 (ハ), 石や (ニ), 大工 (ホ), かじや、などです。

ば、たいへんもうけが多く、じゆうぶんにくらしをたてていくことができることを知ったからです。そうになると、しよくにんたちは、今までつかえていた主人からはなれて、自分たちのなかまだけでくみあいをつくり、しごとをしていくようになりました。そして、世の中がべんりになっていけばいくほど、しよくにんのかずもますますふえていきました。はじめ、しよくにんたち

がつくつていたのは、身分の高い入々や大名や、おかねのある商人たちが使う美しいさいくものや、おりもの・刀・かぶなどが多かったようです。

ところが、江戸にしようぐんがいて、日本じゅうの大名にさしずをする世の中になると、大名たちは、自分のおさめている領地をほかの大名の領地にまけないようにゆたかにするために、自分のところだけにできるめずらしいもの、みごとなものをはかの土地の入々に賣ることを考えました。そこで、日本の國のあちらこちらに、りっぱなうつわ・おりもの・せとものなどをつくるたぐさんのしよくにんが、どんどんできてきました。

あなたがたの住んでいる町や村に、むかしからつくられてきたゆうめいな品物はありますか。

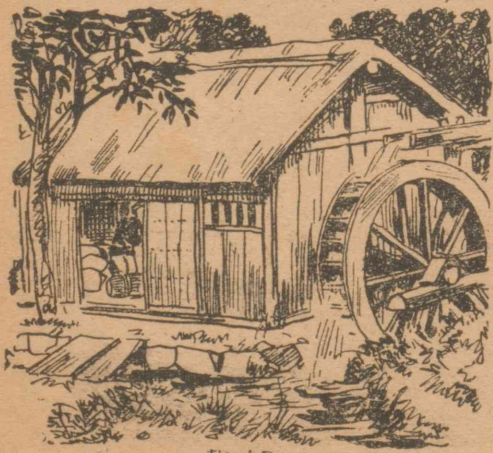


今のかんたんはたおりのきかい

ぬのおるむかしのんた

つているところはありますか。また工場といつても、手や足で動かすかん

このころの物のつくりかたは、たいへんてがるでした。あなたがたの住んでいる町や村には、自分の家のなかにかんたんなしごばをこしらえたり、きかいをそなえついたりして、うちの人たちだけで物をつく



村の水車とや

たんなきかいただけをすえつけた小さいものはないでしようか。ちようどこういうところで作っているようなてがるな方法で、このころの人々はいろいろな物をつくっていました。

このころのしよくにんは、いちにんまえになつてひとりだちをするためには、いろいろと苦労しなければなりません。なん年もあいだ親方おやかたについて、りっぱなうでまえになるようにしゆぎまうしなければならなかつたのです。もちろん、今でも、しごとによつては、こんなふうにして、いちにんまえのしよくにんになるようにしまれる人々もいます。

むかしも今とおなじように、すこしたくさんの品物をつくつて賣ろうとすると、材料を買つたり、工場をつくつたりするのに、なかなかもどがいました。品物をつくつて賣りたいと

思つても、おかねがなくてできないしよくにんもありました。それで、商人やたくさんの土地をもつたおかねもちが工場をつくり、しよくにんをやとつて、物をつくらせるということもだんだんにおこなわれるようになりました。



農具をつくる工場

新しい明治の世の中になると、西洋の國々のすすんだ工業のやりかたや、べんりなきかいが、はいつてくるようになりました。人間の手や足のかわりに、きかいを使えば、なんばいも、なんじゆうばいも、早く物をつくることができず。あなたがたの村や町にある大きな工場と、むかしのままの小さな工場をく

らべてみれば、そのちがいはつきりわかると思っています。

日本が、世界の人々とどんどこうさいするようになる、日本の人々ばかりでなく、世界のたくさんの人々もまた、日本でつくられる品物をほしがるようになりました。そうになると、どうしても、いいものをたくさんつくるために、すすんだべんりなきかいを使わなくてはなりません。

しかし、はじめは、いっばんの人々は、やはり、むかしのままの方法をつづけていて、なかなか新しい方法をとり入れることはできませんでした。それで、はじめのうちには、政府が、外国からきかいを買い入れて、大きな工場をつくり、すぐれたぎしを外国からよんで、しどろしどろもらいました。

こうして、まず、政府でつくった工場や鉄山が、たくさんできてきました。そして、そのうちに、いっばんの人々のなかでも、おかねのある人々は、そのまねをして、新しい工場をつくるようになつていきました。

はじめは、きかいといつても、じょうきのかでうごかすものが多かったようです。いろいろな工業のうち、まず、いとやおりものをつくるしごとがさかんになつていきました。かいこのまゆからいとをとることは、いなかでは、明治の世の中になるまえから、さかんにやられたことでしたが、こんどは、それをきかいのかで、どしどしつくるようになりました。

おりものの材料になるわたも、武士の世の中では、わたのみをつくることからやっていました。明治の世の中になつて、外国とゆききをするようになる、よいわたがいくらでも手に



いとをつくる工場のなか

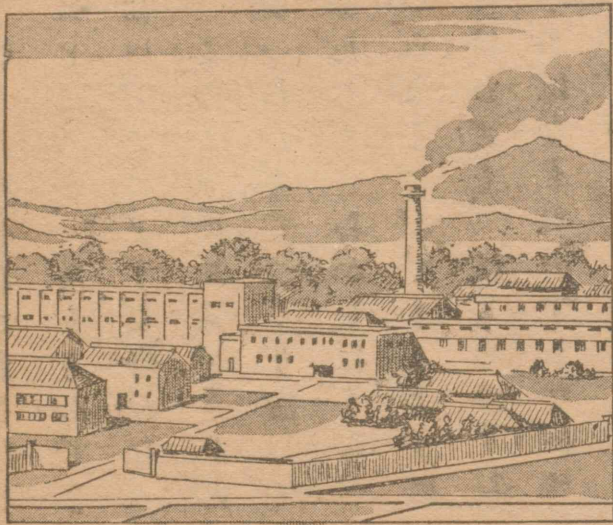
うち、半分以上は、いとやおりものをつくる工場だったということです。

もちろん、そのほかにも、どしどし新しい工業がおこってきました。それに、水の力を利用して、電氣をおこし、それ

きかいを動かすことができるようになります。今までよりもずっと大きな工場が、たくさんできてきました。そして、きかいや船やきかんしゃなどをつくるしごとが、たいへんさかんになっ

ていきました。こういう大きな工場は、交通のべんりな町にたてられるものが多かったようです。

こうして、工場のできた町が、どんどん大きくなっていったばかりでなく、新しい町も、おこってきました。工業の町です。大きな工場がたつと、そのまわ



大きな工場

りに、人々があつまるので、いなかの村から、大きな町になつたところが、たくさんできました。あなたがたの村や町の近くには、このような町がないでしようか。

このように工業がさかんになつてくると、たくさんの品物を、安い値段でつくりだしていくことができます。そのために、私たちも、むかしにくらべて、いろいろなものを、ちくに手にいれることができるようになってきました。

けれども、はじめのうちは、工場にそなえられたきかいにもりっぱなものがないかたうえに、たてもののなかもくらく、そこで働く人々のためのせつびもとのつていませんでした。明治のころにくらべると、今は、工場のなかもあかるく、せいけつて、働く人々のためのびよういんなど、いろいろなせつびをしてあるところもふえてきて、よほどよくなつてきています。が、まだまだ、じゆうぶんとはいえませんが。

#### 農業のうつりかわり

武士の世の中でも、江戸にしようぐんがあるころになると、農業がたいへんすすんできて、新しい土地がかいこんされ、新しい村がたくさんできたという事は、まえにもうお話ししました。

明治の世の中になつて、政治のしかたもかわり、すすんだ学問を、農業のけんきゆうにもとりいれるようになる。農業はいつそうすすんできました。

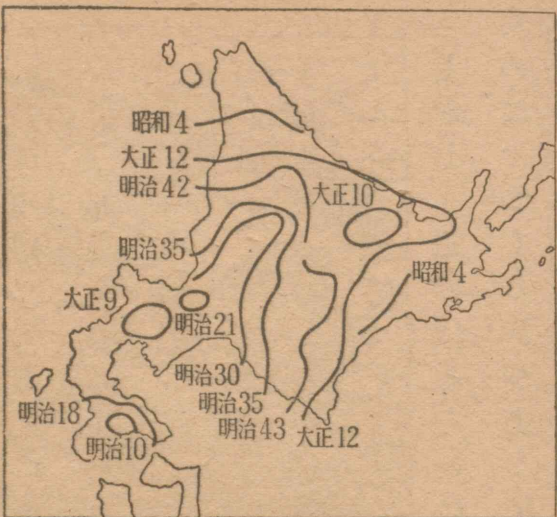
はじめのうちは、農家の人々も、つくったものを、自分たちだけで使つたり、近くの町の人たちに賣つたりするだけでした。

が、鉄道ができて、物を遠くまで運ぶようになってくると、とかいの人々や、ほかの土地の人々のほしがるものをつくったほうが、おかねになることに気がつきました。そこで、人々は、しだいに、高く賣れるものをたくさんつくるようになり、作物のしゆるいもだんだんふえていきました。

ことに、明治のはじめ、政府は、外国から、これまでになかったためらしいやさいをとりいれて、人々につくることをすすめました。じゃがいも・たまねぎ・きゃべつ・とまと・すいかのようなものから、りんご・さくらんぼなどがだんだんつくられるようになったのは、このためでした。

このように、作物のしゆるいがふえてきたばかりでなく、同じ作物でもたくさんしゆるいがつくられ、その土地によくあ

ったもの、今までよりもたくさんとれるものを、つくりだすようにくふうされました。たとえば、米なども、寒いところでも



米は、このように、だんだん寒い北の方までつくられるようになりました。

よくできて、たくさんとれるしゆるいものをつくるのに、たいへん苦心をしました。そのおかげで、北海道や、東北の地方などでは、明治の世の中のおわりごろには、米がたいへんたくさんとれるようになりました。そして、このためには、農業の

ことをせんもんにけんきゆうするしけん場や、せんもんにべんきようする学校がたてられたり、外国からすぐれたぎしをよん

で、しどろしどろしてもらったことが、たいへん役にたったのです。



山や河原につくられているちやとくわの畑です。

外國とのぼうえきがさかんに  
なつてから、かいをかうこと  
や、おちやをつくることも、た  
いへんさかんになりました。そ  
して、そのために、山や河原な  
どがかいこんされて、くわの畑、  
ちやの畑になつていきました。

しかし、そのはんたいに、外國から安く買えるようになった  
ために、つくるひつようがなくなつたものもありました。わた  
などが、そうです。わたの畑は、しだいにくわやちやの畑にか  
わつていきました。また、それものの材料は、今までもにあ

いからつくつていたのですが、その  
かわりになる、もつとよい材料が外  
國で発見されたので、あいをつくる  
こともなくなつていきました。

そのほか、大きな町に近い村など  
では、町に住んでいる人々のほしが  
るやさいや、くだものや、草花をつ  
くつて賣るようになりました。

このように、作物のしゆるいもふえ、今まで以上に、たくさ  
んとれるものが、くふうされるようになったので、農業もたい  
へんさかんになつてきました。

新しく土地をかいこんして、田や畑をつくるといふことは、



畑のちやや草ばなをつくっている





北海道では、きかいを使って、農業をしていました。

明治になつてからも、さかんにおこなわれました。なかでも、北海道では、アメリカのすすんだきかいを使う方法をとり入れたので、たいへん広い土地がかいこんされました。

また、学問のけんきゆうがすす

むにつれて、今まではどうすることもできなかつた、ひでりや大雨のひがいをすくなくすることもできるよふになりました。田へ水をひくべんな方法も、考えだされました。そして、そのおかげで、田や畑も、だんだんとのつていきました。

しかし、日本は、たいへん山の多い國で、ひろびろとした野

原があまりありません。ですから、学問の力を利用して、新しいりっぱな田や畑をたくさんつくつていくことは、なかなかむずかしいことでした。

人口がふえてくると、今までよりもつとたくさんシヤクモノの食料がいふようになります。そこで人々は、たとえば、同じ米でも、てきるだけしゆうかくの多いしゆるいをつくりだそうと考えました。また、いねがそだちにくいと考えられていた土地でも、くふうをすればりっぱな米がとれるということに氣がつかしました。しかし、それだけではじゆうぶんとはいえませんが、さらに、よいひりようを使ってしゆうかくをふやすよふにくふうをしていきました。そして、学問のすすんだおかげで、今までにないよいひりようがつくられると、それを使って、二ばいも、

三ばいもの作物がとれるようになりました。

このように、いなかの人々は、いろいろと、くふうにくふうをかさねて、よい作物がたくさんとれるようにほねをおつてきたのでした。しかし、そんなに熱心にくふうをしてみても、農家の人々のくらしのほうは、それほどよくはなつていきませんでした。

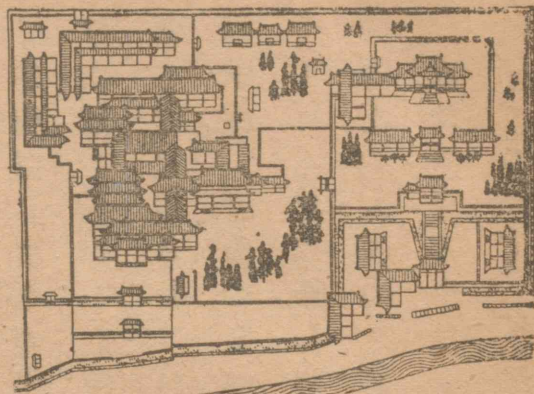
明治の世の中になると、田や畑も、自由に賣つたり、買つたりできるようになりましたが、そのために、商人や地主は、たくさんの土地を買いあつめることができました。そして、そのほんたいに、おかねにこまつて、土地を賣り、ひとの土地をかりて、たがやさなくてはならない人々も、だんだんふえていきました。

これらの人々のなかには、くらしにこまつて、町にはたらきにてたり、工場にはたらきにいったりしなければならなくなつた人も、たくさんててきました。

### 新しい学校

学校は、日本のずっとむかしにもありました、今から千二百年ほどまえに、そのころのみやこをはじめとして、國じゅうのおもなところに、はじめて学校がつくられました。しかしこの学校は、身分の高い人々のこどもたちだけがはいつて、政府のやくにんになるために、べんきようするところだったので、いっばんの人々のこどもは、はいれませんでした。

武士の世の中になると、これらの学校は、みんななくなつてしまったので、武士のこどもで、学問をしたいものは、おてら



これは、江戸にたてられた武士のための学校でした。昌平校しやうへいこうとよばれていました。左の上の方にあるたてものは、学生のねとまりするところ、その下にあるのは教室のようなものです。

などについてべんきようをしたものでした。

江戸にしようぐんがいるようになると、そこに武士のための学校がたてられました。これは、今の大学のようなもので、おもに中國からつたわつてきた学問をおしえていたのです。また、そのほかに、武士の世の中がおわりに近くなると、日本の古いしよもつをおしえる学校、西洋のことをべんきようする学校、いしやをつくる学校などが、江戸にもうけられました。ほうぼうの大名たちも、このまねをして、じぶんのしろのある町に、けらいのこどもたちをいれる学校をつくりました。



武士たちは、このようなじゆくで、学問をしました。

武士のこどもたちは、これらの学校にはいるか、学者などが自分の家でひらいている、じゆくといふものにかよつて、おもに、中國からつたわつてきたむずかしい学問をべんきようしたものでした。

武士でない人々のこどもたちで、べんきようしたいものは、てらこやといふものにかよいました。てらこやは、ぼうさん・かんぬし・いしや・ろうにんなどが、たいてい、じぶんの家のぞしきなどを教室にして、おしえていたのですが、なかには、生徒が多いために、とくべつに学校の

ようなたてものをたてたところもあります。



むかしのてらこやと今の学校

いって、いちばん力をいれたがつかでした。

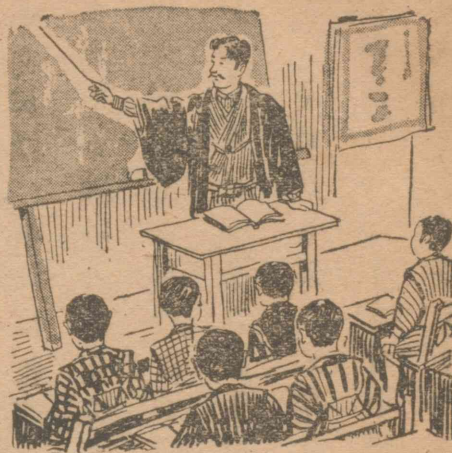
武士の世の中のおわりごろには、日本じゅうに、たくさんのてらこやができていきました。あなたがたの村や町には、てらこやにかよって、べんきょうしたところのあるとしよりが、まだ

いくにかのこっていることでしょう。

しかし、今あなたがたのかよっているような学校ができたのは、明治の世の中になってからのことです。

明治になると、まず、東京に大学がつくられて、外国のすすんだ学問をべんきょうできるようになりました。そして、この大学には、学問にねっしんで、べんきょうのよくできる人なら、だれでもはいれることになりました。

大学ができたのにつづいて、日本じゅうに、たくさんの学校をつくるといふきまりができました。これは、明治五年のことで、それから五、六年のうちには、日本じゅうのたいいの町や村に、今のような小学校ができました。そのころ、まだいなかには、西洋づくりのたてものなど、ほとんどないところへ、



明治の世の中のはじめのころの学校のありさまです。今の学校とくらべてみてごらん下さい。

大きなペンキぬりの学校がたてられたので、人々はたいそうおどろいたといふことです。

武士の世の中では、武士のこともと、ふつうの人たちのこともとは、べつなところにかよつて、ペンキようしたのですが、この新しい学校へは、これまで、武士だった人たちのことも、いっばんの人たちのことも、いっしよにはいって、つくえをならべて、ペンキようすることになりました。

また、新しい学校では、てらこやのように、よみ・かき・そろばんばかりでなく、外國からきたさんじゆつ、りか、たいそ  
う、おんがくなどの新しいがつかのペンキようができるようになりしました。そして、小学校ばかりでなく、中学校・女学校もできてきました。またこれらの学校ができると、その学校の先生をつくるためのしはん学校もできました。そして、日本の商業・工業・農業などが、さかんになるにつれて、商業学校・工業学校・農学校などもつきつきにつくられていきました。日本の人々の生活が、すすんでくればくるほど、学校のしゆるいもふえ、かずも多くなつてきたのです。そして、学校にはいってペンキようする生徒や学生のかずも、たいそう多くなりました。

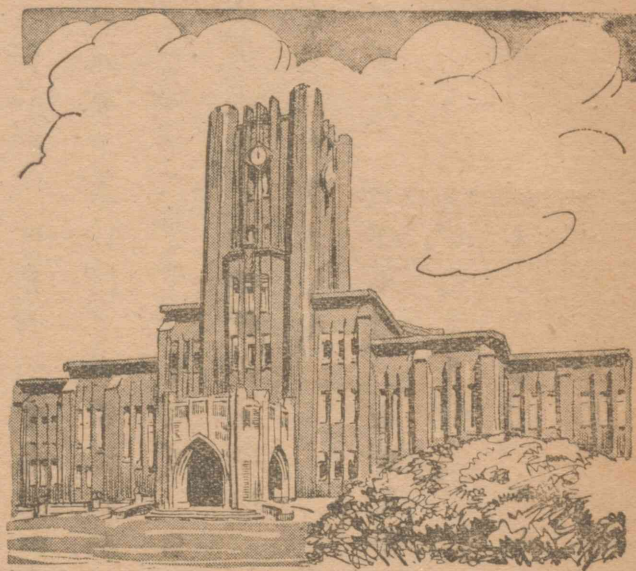
このほか、目がみえない人、耳がきこえないために、ことばが話せない人などのためにも、とくべつの学校ができて、あな

たがたと同じように、べんきょうでできるようになってきました。このように、日本の学校は、明治になってから、きゆうにとのつてきました。まえにお話ししたように、明治の世の中になつて、日本の工業・商業・農業がさかんになつたのも、そのほか人々の生活がべんりになつたのも、ひとつには、この新しい学校でまなんだたくさんの人々が、世の中にでてはたらいたからです。そのなかには、名まえが、世界じゆうの人々に知られているようなすぐれた人々もでてきました。

はじめて小学校ができたばかりのころは、なん年かん学校にかよわなくてはならないという、はつきりしたきまりはありませんでした。しかしそのうちに、四年かんだけは、どうしてもかよわなくてはならないという、きまりができました。けれども、日本の生活がすすんでくると、これでもたりなくなってきました。そこで、六年かんはだれでもいかなくはならないことになりました。

しかし、世界のすすんだ國々では、もっとまえから、たいてい八年ぐらいは、学校にいかなくてはならないという、きまりになつています。そこで、日本でも、昭和二十二年から、小学校の六年と中学校の三年は、だれもが、いかなくはならないことになりました。

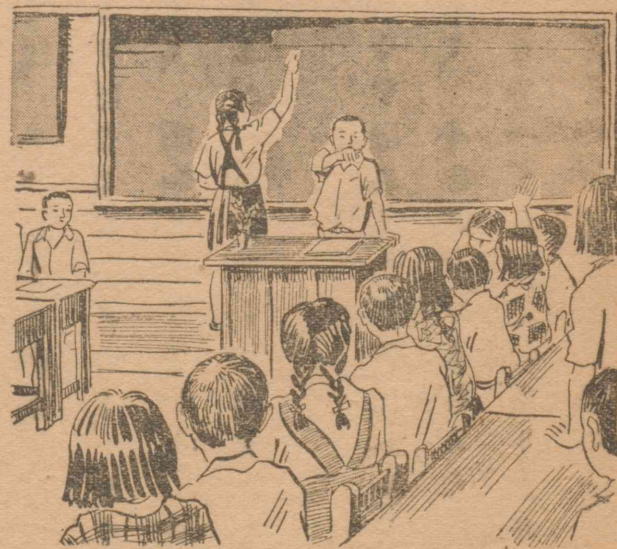
また、日本では、むかしから、女子はあまり学校にいかないというふうがありました。はじめて、小学校ができたころには、小学校にかよう女子は、男子の三分の一ぐらしかありませんでした。女学校の生徒のかずも、男子の中学校の生徒のかずに



なかの大学ばり

くらべると、ごくわずかなものでした。

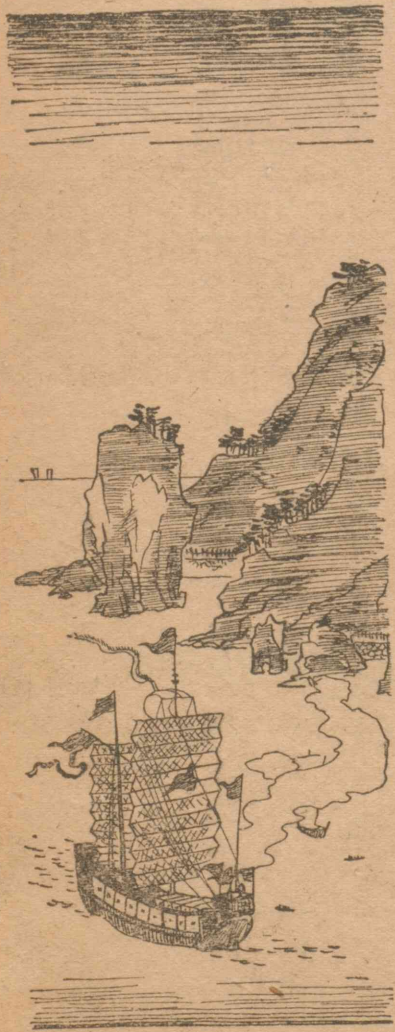
しかし、そのうちに、だんだん世の中の人々も、女子も男子と同じように、べんきょうしなければならぬことに、気がつ



中学校でべんきょうしている男子も女子もいっしょ

いてきたので、小学校はもちろん、中等学校でも、女子の生徒のかずが、男子の生徒のかずとおなじぐらいにふえてきました。けれども、それより上の学校になると、やはり女子の学生は、ごくわずかしきありませんでした。

こんど新しい学校のきまりができて、女子も男子と同じように、高等学校へも、大学へもはいることができるようになりま



五、 私たちの村は、どんなふうにかわってきているか

ことしは、雨が多かったのに、かんじんの川上の方では、あまり降らなかつたということで、川には電氣をおこすだけのじゆうぶんな水がなく、秋もなかばをすぎたころから、ときどきてい電がおこるようになりました。こんやも、夕ごはんがすんだあと、みんなて、うらの山からとつてきたくりのみを、おいしそうにたべていると、ぱつと電とうがきえてしまいました。おかあさんが、すばやく、ランプの用意をしていらつしやいます。

おじいさんが長いきせるですつているたばこの火だけが、ぼうつとあかるくみえます。廣くんとみちこさんは、つまずかないうように、そおつとしよくたくをまわつて、おじいさんのりょうわきにすわりました。

「おじいさん、ぼく、エジソンが電きゆうをつくつたという話をよみました。この村には、いつごろから電とうがともつたのですか。」

廣くんが、くらやみのなかで、おじいさんにききました。

「うん、電とうかね。電とうがついたのは、たいしてむかしのことではないよ。おじいさんは、ちようどこのとき、おかあさんのともしたランプの光で、きせ





るにたばこをつめながら、お答えになりました。

「考えてみると、ランプの光も、なかなかつかしいものだ。おじいさんがおまえたちぐらいのころには、このへんでは、こんなにくらいランプしかなかったのだからね。それが、だんだんべんりになってきて、とうとう電とうがつくようになってた。この村に、はじめて電とうがともったのは、たしか三十年ぐらいまえのことだろうね。役場のげんかんにともるというので、みんなおしかけていってけんぶつしたものだつたよ。この家についたのは、いつごろだつたらうねえ、おとうさん。」

「私が十二、三のときだから、二十五、六年まえになりますね。」おとうさんは、どまのくらがりで、なにかしごとをしていら

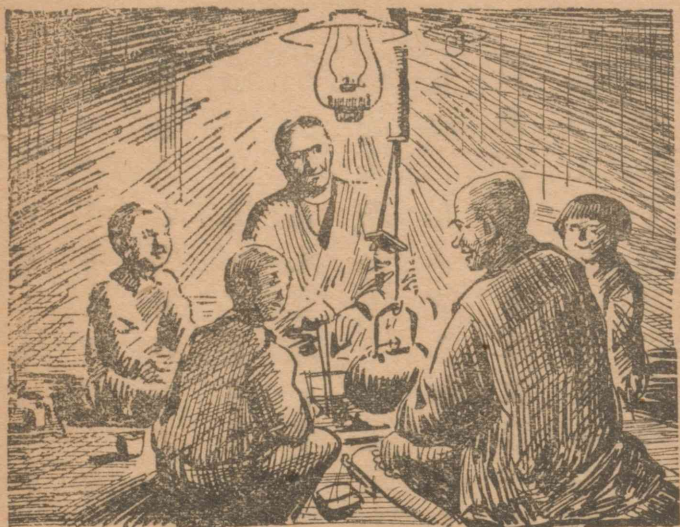
っしやるようです。

「おしろの町に、汽車が通るようになったのは、いつごろです

か。」

「こんどは、みちこさんがしつもんしました」

「そうだ。あれは、おじいさんが十七、八のときだ。だから、もう五十年以上まえになるだろう。いよいよ汽車が通るといふ日には、村の人が、朝からべんとうをもつて、ぞろぞろけんぶつにてかけたものだ。汽車といつても、そのときの



は、今のにくらべると、かたちも小さいし、たいして早くもなかつたものだが、なにしろそのときには、みんなたいへんおどろいたものだよ。なん時間もなん時間もまったあげくにまっくらいけむりをはく汽車がいさましく走るのをみたときには、みんな思わず、ばんざいをさけんだね。汽車にのつていた人たちも、まどからはたをふつていた。あのときのきもち、ちは、ちよつとわすれられないなあ。」

「汽車が通るようになってから、村の人たちの生活は、どんどんべんりになってきたのでしよう。」

「いつそくとびに今のようになってたのではないが、だんだんべんりになったことはたしかだね。」

「おじいさん、どんなところがべんりになったのですか。くわ

しく話してください。」

「廣くんは、なかなかねっしんです。」

「いや、そういわれても、ちよつとこまるね。べんりになったところは、かぞえきれないほどたくさんあるよ。まあ、氣のついたことから、すこしずつ話してみよう。」

このとき、きゆうに電とうがついて、あたりはひるまのようにあかるくなりました。みちこさんは、「やはり電とうは、あかるくてよい。」と思いました。おじいさんは、にこにこしながら、話をつづけていらつしゃいます。

「汽車が通るようになって、いちばんべんりになったのは、遠くの土地とゆききすることだろう。鉄道のおかげで、どれだけてがるに旅ができるようになったかわからない。それに、



むかしのポスト

「いや、ゆうびんきよくは、たいして古くないだろう。むかしはあすこに、葉書や切手を賣る店があつて、のきしたに、赤いはこのポストがぶらさがつていたものだ。おしろの町には、ずっとむかしから、ちゃんとしたゆうびんきよくがあつたが、これは、鉄道が通るまえからだ。電ぼうがうてるようになったのは、だいぶんあとのこ

から、村では、いちばん家のこみあつたところだつたね。」  
 「役場のとなり、ゆうびんきよくができたのも、だいぶんあとのことになりすねえ。」  
 おとうさんが、よこから口をいれました。  
 「いや、ゆうびんきよくは、たいして古くないだろう。むかしはあすこに、葉書や切手を賣る店があつて、のきしたに、赤

駅のある町まででるのにも、馬車がどんどん走るようになってきたし、たいへんらくになったものだ。ブーブーブエをふきながら走っていく馬車なんかは、廣やみちこに、せひみせたい氣がするね。  
 ところで、遠くのとかいのゆききがらくになってくると、いろいろべんりなもの、たくさんはいつてくるようになる。ことに、外國でつくつた品物は、はくらくといつて、たいへんめずらしがつたものだ。こんなふうだから、村にも、ぼつぼつとお店ができるようになった。役場のあたりは、そのころ



とだがね。なにしろ、汽車が通つてからは、手紙なども、ずつと早くとどくようになったのは、大だすかりだった。」  
このとき、おかつてから、おかあさんの声がしました。  
「みちこさん、あしたは、しんたいけんさがある日でしょう。おゆがわいていますから、早くおふるにはいりなさい。」  
みちこさんは、おかあさんにへんじをすると、おじいさんにちよつとことわつて、だいどころの方にとんでいきました。  
「この夏には、みんなチブスのよぼうちゆうしゃをしましたが、おじいさんのちいさいころにも、あんなちゆうしゃがあつたのですか。」

「いやいや、よぼうちゆうしゃなどというものは、ついさいきんできたものだ。この村など、おじいさんのころは、

「おいしゃさんがひとりもいなかったから、くすり賣りから買ったくすりでまにあわないような病氣になると、はるばる町のびよういんまでいなくてはならなかつたくらいだ。  
おじいさんの、またおじいさんが生きていらつしやつたころに、たいへんわるい病氣がはつたことがあるそうだが、そのときも、おいしゃさんはいないし、とうとう村の人たちが半分以上、その病氣にかかつて、ずいぶん死んだ人もでたという話だ。むかしは、でんせん病のことを、えき病といつたのだが、これがはやりだすと、わけがわからないので、ただおいのりばかりして、さいなんをのがれようと考へたものらしい。だから、今のようによきとどいたてあてをすればよくなるものも、どんどんおもくなるばかりだったのだ。」

「廣のむしばも、早くてあてをしないといけなね。」  
おとうさんが、ちゅういをなさいました。廣くんは、二、三  
にちまえから、すこしはがいたむのです。

「おいしゃさんがいれば、病氣をしても、安心していられる。  
しかし、てあてをしてもよくならぬものもあるし、病氣にな  
らないにこしたことはないだろう。」

おいしゃさんやほけんじよにも、病  
氣になってからごやつかいになるだ  
けではなくて、ふだんからときどき  
みていたたく心がけがだいじだよ。  
いなかは、とかいより空氣がよくて、  
むねの病氣などはすくないというこ



村のほけんじよ

とだったが、氣をつけない人が多いので、このごろはだいぶ  
ふえたという話だ。それに、かいちゅうなんかは、きつと町  
の人より多いだろう。廣のむしばも、はやくなおさないど、  
氣がつかないうちに、からだにこしょうができてくるよ。お  
じいさんも、わかいころに、もつとはをだいじにしておけば  
よかつたと思つている。なにしろ、そのころは、はがわるい  
といつても、おしろの町にだつて、まだはいしゃさんはなか  
つたのだからね。」

おとうさんは、さつきから、電とうの下で、しきりにかきつ  
けをみていらつしやいます。おじいさんが、ちよつとせきを立  
たれたので、みちこさんは、こんどは、おとうさんにしつもん  
をはじめました。

「おとうさん、それはなにのかきつけなの。」

「これはね、土地をうりかゝいするやくそくのかきつけだよ。」

おとうさんは、にっこりわらって、たばこの火をつけながら、せつめいしてくださいました。

「さいきん、新しいほうりつができたので、今までかりて、たがやしていった土地は、買って自分の土地にすることができるようになったのだよ。川むこうの山の畑は、むかしからよくせわをした土地だから、まえから、ほしいほしいと思つていたが、とうとうおとうさんの土地になった。これからは、ひとりでたくさんの土地をもつ人もなくなるし、自分は町にいて、いなかに田やはたけをもっているという人もなくなるわけだ。」

「村の人が、みんな自分の土地をもつんですね。」

「そうだ。だから、しんけんにはたらいてさえいれば、だんだんよいくらしができるようになるだろう。今までは、どんなにはたらいても、すこしむらしがらくにならなかつたのだからね。おとうさんがわかひころには、この村の人たちも、くらしにこまつて、ほかの土地にはたらしにいつたり、なかには、とうとう村をはなれてしまつたりする人も、ずいぶんあつた。とかいの工場にはたらしにでた人のうちには、病氣になつて、帰つてきた人も多かつたようだ。そのころにくらべると、村のくらしも、ずいぶんらくになつてきたものだ。」

「せんそうのあいだは、入でがなくて、ずいぶんこまりましたよ。」

そのとき、ちようどおかつてのしごとをすませて、おへやにはいつてこられたおかあさんが、おっしやいました。

「おとうさんがせんそうから帰るまで、おかあさんはたいへんだったなあ。しかし、せんそうでは、もつともつときのどくな、ふしあわせな人が、村にもたくさんできたねえ。」

「おとうさん、話はちがいますが、きよういくいいんのせんきよというのはなんです。学校のまえに、ポスターがありました。」

廣くんが、とつぜん、おとうさんにたずねました。

「きよういくいいんのせんきよかね。あれは、この縣で、よくもののわかつたりつばな人を七人えらんで、その人たちにきよういくのやりかたをよく考えてもらおうというのだ。だから、

ら、とてもたいせつなせんきよだよ。せんきよは、今までにもたびたびあったから、もうようすがわかつているだろうが、せんそうのあとになってやつと、女の人も男の人と同じように、せんきよのしかくができたのだ。女の人だつて、きよういくいいんにでも、國会ぎいんにでも、なんにでもなれるんだ。むかしにくらべると、すっかりかわつたねえ。村長さんを、村の人みんなのせんきよでえらぶようになったのも、ついさいきんのこと、それまでは、村会の人だけできめていたのだから。」

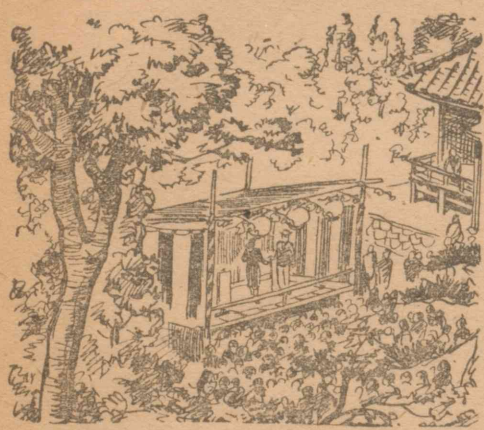


きよういくいいんのせんきよ

でも、そんなにたいせつなせんきよのしかくをもっていないが  
ら、どうひょうにいかなかつたり、自分でよく考えずに、人  
のいうとおりにとりひょうしたりする人があるのは、おしい  
ことです。」

おかあさんは、ほんとうにざんねんそうにおっしゃいます。  
そのとき、おじいさんが、へやにもどつていらつしやつたの  
で、話はまた、むかしはなしになりました。

「このあいだ、旅行をしたとき、色のついたえいがをみたが、  
たいしたものができる世の中になつたな。そうそう、テレビ  
ジョンとかいうものも、きつと近いうちに、どんどん使われ  
るようになるにちがいない。むかしにくらべると、ずいぶん  
たのしみもふえたものだよ。」



おじいさんのわかかつたころには、えいがもなければ、ラジ  
オもない。こんなへんびな村には、旅のしばいもやつてはこ  
ないし、せいぜい、年に一かいのおまつりに、みんなでおど  
つたりするくらいが、たのしみだつたよ。それでも、ときど  
き町までいけるようになってからは、町のお店でほしい物を  
買つたり、ちよつとしばいごやにはい  
つたりすることもできるよになつた  
がね。今は、バスにさえあれば、かん  
たんに町までいけるし、また町なんか  
にでかけなくても、やきゆうをやつた  
り、学校でえいがをみたり、てがるに  
たのしめるからべんりになつたよ。」



「おじいさん、べんりだべんりだというけれど、きよねんの冬みたいな、てい電ばかりだと、かえってふべんじやないかしら。」

廣くんが、そういつたので、みんなわらいだしました。おとうさんも、わらいながら、

「そうだ。まだまだふべんなことが多いね。大水がでるとこまるし、そうかどいって、だいじなときに雨が降らなくてもこまる。つゆのころに、まえの川があふれだして、土手がきれそうになったときには、みんなあわてたなあ。どんなに雨が降っても、あんな心配をしないですむように、まえから用意しておかなければいけないのだ。大水ばかりじやない。ちよつと村の生活をながめてみても、よくしなければいけないと

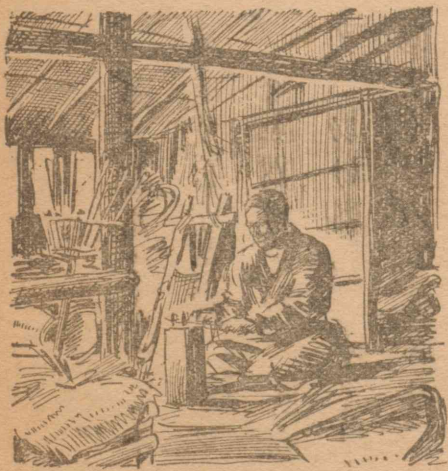
ころが、たくさんあるからね。」とおっしゃいます。

「家のたてかたなんかも、むかしのままで、ふべんなどころが多いでしよう。くらいへやがたくさんあるし。」

おかあさんも、なかなかいけんをもつていらつしやるようです。

「たべものだつて、もつと考えたほうがいいつて、ラジオでいつていたわ。」

みちこさんも、まけずにいいます。廣くんは、エジソンの発明の話の思いだしました。



くらいへやの多いなかの家。このような家を見て、どんなことを考えますか。

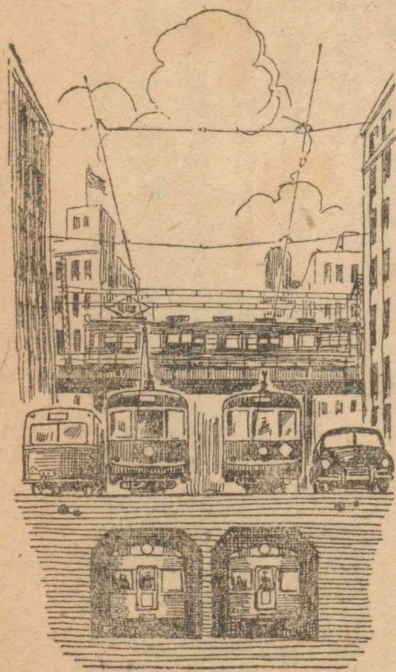
「エジソンみたいに、大発明をやれば、きっとみんなの生活がよくなるよ。」

「うん。そのとおりだ。みんなが、どうしたらもつとうまくいくだろうと、いつもくふうをするようにすれば、きっとよい生活ができるようになる。だが、それだけでは、まだたりないね。みんながよく力をあわせて、助けあわなくてはだめだ。一けんの家でも、みんながきもちよく、力をあわせていなければ、きつと失敗する。」

いなかでは、まだ古いしきたりがつよくて、ほかの土地からきた人をのけものにしたたり、むやみに人の家のうわさをしてみたり、今までそうしたからと、いうので、むだなかねを使つてみたり、まだ男が女にいはつてゐるし、わけのわからな

いめいしんを信じてゐる人もあるし、いろいろなおさなければならぬところがある。こういうことを、みんなで力をあわせてよくしていかないなら、どの人もみんな幸福になるというような日は、なかなかこないだろう。」

おとうさんのお話がとぎれると、庭でなく虫の音が、いちだんとよくきこえてきます。



## 教師のかたがたへ

こんど出された社会科指導要領補説に、第四学年の主要経験領域が「私たちの生活の現在と過去」と示されているように、この期の児童には、歴史的意識が芽ばえてくる。もちろん、このことは、明確な時代の観念に基づいて、事象を発展的に理解するということを、ただちに意味してはいない。児童に把握される過去は、現在と対比された昔として、一樣に理解されるという程度を出ないであろう。ともあれ、三年までの児童に比較して、歴史的なものへの「関心」が高まってきたことは、われわれの多くが経験するところである。

この書、「日本のむかしと今」は、このような意味において日本の歴史的なことから、われわれの祖先の生活に取材し、生産・消費・交通・通信・政治・教育その他、社会生活における主要なことから、昔にくらべてどのように便利に豊かになつてきたかということを理解させ、現在の人間生活・社会生活に対する目をひらき、これについての知識や、理解を廣め、かつ高めることを主要なねらいとしたのである。

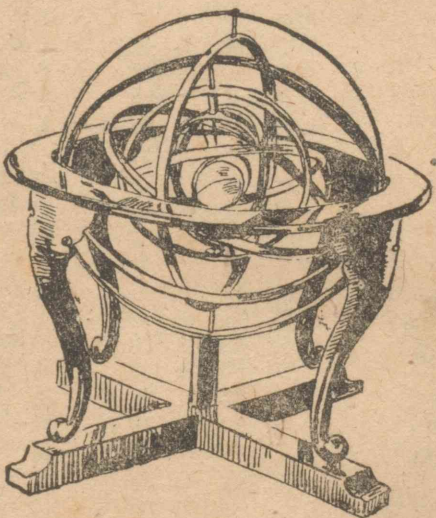
一般に、社会科の学習指導では、歴史的なものの取り扱いかたが、とかく無理強いや暗記に終るという傾向がよい。そのため、この書では、なるべく児童の直接的な、あるいは間接的な経験に訴えることによつて、理解が廣められ、また学習活動の手がかりが、與えられるように注意したつもりである。

もちろん、このねらいは、かならずしも十分にはたされたとはいえないかもしれない。したがつて、教師はこの点に留意して、実際にあたつては、できる限りさし給そ他の材料をおぎない、児童の経験に訴えて、指導に効果のあるよう努めていただきたいと思う。

ここにことわるまでもなく、この書は、従來のいわゆる教科書でもなく、まして、歴史の教科書という性格のものでもない。あくまでも、歴史的なことがらに取材した一つの参考書として取り扱つていくべきものである。

また、この書と三年用として配本された「大むかしの人々」との関係についていえば、「大むかしの人々」のあとがきでものべてあるように、「大むかしの人々」は、この書の序説ともいうべきものであるから、この書の内容を理解するためには、その書の内容が、大いに役立つと考えられる。実際の指導にあつては、子供の理解の程度に應じて、適宜両書を融通して、使用するように配慮していただきたいと思う。





1500	1543	1603	1639	1853	1868	1900
	の	中	江戸時代	明治	新世の中	
			徳川家康が、江戸に政治の中心をおいて、世の中をおさめるようになった。	アメリカ人が、四そこの船をひきいて日本にきた。みやこが東京にうつされて、外国と自由にゆききできる新しい世の中になった。		
			ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。キリスト教が伝わった。信長、秀吉がしめて、おさめていた。			
			外国とのゆききかためられた。			



日本のおかしのおもなできごと

538 佛教が、大陸からつたわる。

607 中国にはじめて、國から使いがたされた。

710 奈良にりっぱなみやこがつくられた。

794 京都へみやこがうつされた。

894 中國へ、國の使いを送ることをやめた。

さむらいのいきおいが、だんだん強くなってきた。

1192 源頼朝が、鎌倉に政治の中心をおき、世の中をおさめていくようになった。

京都に政治の中心がうつされた。

世の中がみだれて、大名たちがあざをいあつた。

1543 世の武士の

ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。  
キリスト教がつたわる

-700

710

奈良にりっぱなみやこがつくられた。

-800

794

京都へみやこがうつされた。

-900

894

中国へ、國の使いを送ることをやめた。

-1000

-1100

さむらいのいきおいが、だんだん強くなってきた。

-1200

1192

<sup>みなもと</sup>源頼朝が、鎌倉に政治の中心をおき、世の中をおさめていくようになった。

-1300

武士

京都に政治の中心がうつされた。

-1400

の

世の中がみだれて、大名たちがあざをいあつた。

-1500

世

1543

ヨーロッパのポルトガル人が、日本にはじめてきた。  
キリスト教が伝わった。  
みだれた世の中を、信長、秀吉がしめて、おさめていた。

の

徳川家康が、江戸に政治の中心をおいて、世の中をおさめるようになった。

中

1639 外国とのゆききか止められた。

-1700

江戸時代

-1800

1853

アメリカ人ペリーが、四そこの船をひきいて日本にきた。

1868

みやこが東京にうつされて、外国と自由にゆききできる新しい世の中になった。

新世の中

-1900

明治  
大正  
昭和

社会科 第四学年用  
日本のむかしと今  
Approved by Ministry of Education  
(Date Dec. 4, 1948)

昭和二十三年十二月四日 翻刻印刷  
昭和二十三年十二月二十五日 翻刻発行  
〔昭和二十三年十二月二十五日 文部省検査済〕

定価金貳拾七円七拾弐

著作権所有 文 部 省

東京都北区堀船町一丁目八五七番地

翻刻発行者 東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

東京都北区堀船町一丁目八五七番地

印刷所 東京書籍株式会社堀船工場

東京都北区堀船町一丁目八五七番地

発行所 東京書籍株式会社

